

E区SD-1出土遺物

第18図 長須賀条里制遺跡 (C区～E区古墳時代)

の南北畦畔は幅が1 m以上で内部に耕作痕跡を伴っておらず、また調査区が推定条里で南東側の坪境付近にあたるため、坪畦畔の可能性はあるが、断片的な調査であるためはっきりしない。

なお本地域の表層条里からみた推定地割りの方向は東に10°程振れているが、今回検出された畦畔はほぼ真北に近い。時期については推定する資料に乏しく不明であるが、出土遺物から概ね中世以前の時期を考えることができる。

E区では、調査区の北部を中心に確認されている。この部分の基盤層は海成砂層であり、その直上が近世以降の耕作土であるため、手畔を盛る際に掘られた掘削具痕跡を伴う浅い溝を畦畔の痕跡として認定したものである。

②小区画水田跡

B区とE区で検出した。

B区では南北方向7条、東西方向14条～15条の小畦畔と、それにより区画された65区画以上の小区画からなる。大畦畔や利水施設は調査区内には確認されていない。小区画は南北にやや長い長方形を基本としているが、変形したものも多く、面積も偏差が大きい。この地点の埋没地形が東側の丘陵から張り出した微高地と後背湿地にかかる緩斜面であることと、東西小畦畔の軸方向がごくわずかに放射状になっている点を鑑みると、南北の小畦畔を基準とし、これを細分することによって小区画を形成したのであろう。

E区では、調査区を袈裟懸けするように南北に流れる古墳時代の水路(E区SD-1)の西側に、上下2面が検出された。畦畔はいずれも疑似畦畔Bだが、比較的明瞭である。ただ、畦畔部分にも若干の耕作痕跡が認められることから手畔と考えられ、水口と考えられる畦畔の途切れる箇所が数箇所確認されている。確認された範囲が狭いため、区画の形態ははっきりしないが、方形ないし長方形を基本としているようである。軸方向は上下で若干異なり、第1水田面が水田域の西側は調査範囲外となるためはっきりしないが、東側と南側の限界はE区SD-1により規制されていることが伺える。本地点は砂堆と丘陵裾に挟まれた後背湿地に立地するが、その中でも埋没地形の起伏が著しいことが今回の調査で判明しており、低い部分に比較的小規模な水田域を形成したものと考えられる。利水施設は水路、建築部材を転用した木樋による給水の枝水路のほか、枝水路の末端に溜井戸状の土坑を伴っている。時期は枝水路及び溜井戸で出土した遺物から、概ね古墳時代前期後半～中期前半をあてることができる。恐らく水田もこの時期であろう。

(4)その他の遺構

多くの遺構が確認されているが、主として祭祀関連の遺構が多く、農耕遺構に伴うと考えられる集落域や墓域は確認されていない。ただ、現在の集落や畑として利用されている本遺跡の東側丘陵の裾付近の微高地に該期の遺物が多く散布されているといわれており、丘陵上にはとても集落をつくる地形的な余裕がないため、この部分に集落が存在した可能性が高い。また、本遺跡は後背湿地に立地しているが、その中においても、現状で1.5m以上の比高差を持つ微高地がいくつも見出されており、中世以降の水田耕作によって削平されているであろうことを鑑みると、この部分に集落が存在した可能性も捨てきれない。いずれにしても、集落域と水田域が比較的近接した景観を想定することができよう。

5. 常代遺跡・郡条里遺跡

(1) 遺跡の概要

常代遺跡は君津市常代字上檜添、郡条里遺跡は君津市郡に所在する。房総丘陵に源を発し、東京湾に注ぐ小糸川下流域左岸の低位段丘および自然堤防上及びその南側から小糸川に流入する支流の松川が開析する谷にかけて立地しており、現地表の標高は16m前後である。土地区画整理事業に伴って平成2年度～平成5年度にかけて君津都市文化財センターが調査を実施した。このほか平成10年度には国道127号拡幅工事に伴って当センターが東側隣接地を調査した。調査面積は常代遺跡の君津都市分が20,000㎡、県センター分が2,000㎡、郡条里遺跡の君津都市分が10,000㎡、県センター分が1,000㎡である。検出された遺構は弥生時代中期～後期の方形周溝墓群、土壙群、自然流路、古墳時代の水路と円墳周溝、小区画水田跡、奈良・平安時代から中世の掘立柱建物跡など非常に多岐にわたる。中でも遺物では常代遺跡の弥生時代中期の自然流路から農具を含む多量の木製品が出土しており、特筆される。

なお、県センター調査分については現在整理作業中である。

(2) 基本土層

常代遺跡の君津都市調査区については大きく、Ⅰ層(表土・耕作土)、Ⅱa層(黒色の強い黒褐色土)、Ⅱb層(褐色の強い黒褐色土)、Ⅱc層(灰色の強い黒褐色土)、Ⅲ層(黄褐色土)、Ⅳ層(灰色砂)、Ⅴ層(Ⅳ層とⅥ層の間層で、灰色粘質土と暗褐色粘質土の互層からなる)、Ⅵ層(黒色粘質土で、灰白色のテフラを2層含む)、Ⅶ層(Ⅵ層とⅧ層の間層で、灰色シルト中心)、Ⅷ層(灰色粗砂でラミナが顕著)の8層に分けられている。堆積時期はⅠ層が近世以降、Ⅱs層が中世、Ⅱb層が平安～古墳時代後期、Ⅱc層が古墳時代前期～縄文時代晩期終末、Ⅲ層～Ⅵ層が縄文時代後期以降とされている。本遺跡は近世以降の削平が著しく、Ⅱ層の堆積が薄い。県センター調査区も基本的には同様な堆積状況であるが、近世以降の削平が特に著しいためⅡ層は遺存していない。いずれもほとんどの遺構はⅢ層上面で検出している。

(3) 農耕遺構

検出された農耕遺構は水田跡、畑跡、水路跡、利水遺構(自然流路、取水堰、分水堰、水路)である。

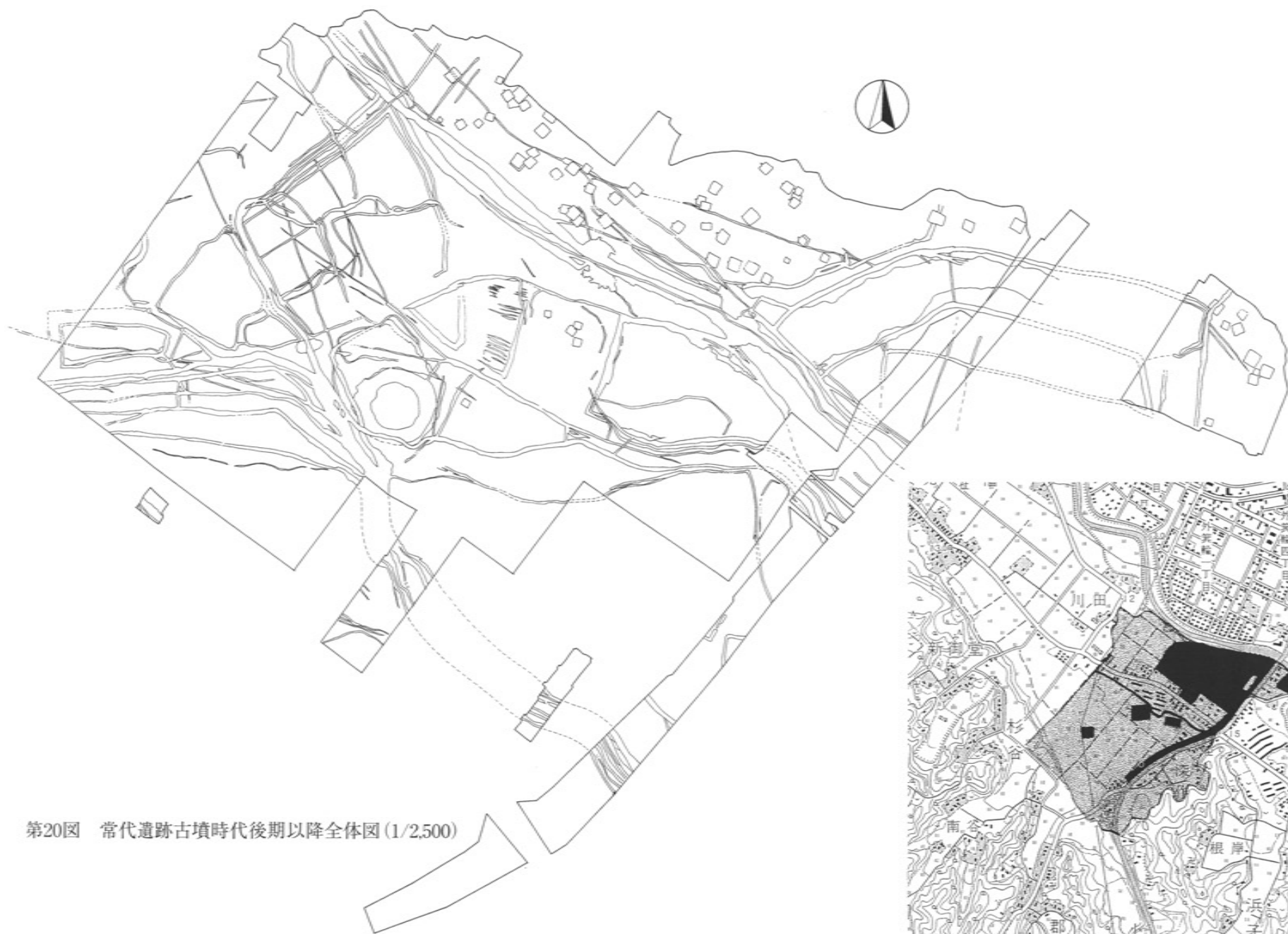
① 水田跡

常代遺跡と郡条里遺跡の県センター調査区から検出された。

常代遺跡では、後述する小糸川の旧河道であるSD-220の北側に位置する。確認面はⅢ層上面で、検出されたのは中央に水路を伴う大畦畔と小畦畔である。近世以降の削平により状況は非常に悪く、いずれも疑似畦畔Bの最下部での検出であり、区画内にもほとんど耕作痕跡は認められなかった。

水路はほぼ直線的で、方向は北から東に約30°程振れている。流水の方向は不明だが、恐らく南→北へ流れていたものと考えられる。なお大畦畔には杭や矢板などによる補強の痕跡は認められていない。小畦畔は水路の東側に南北3条、西側に南北4条、東西方向はともに8条程度が検出されているが、断片的である。区画は一辺2m前後の方形を基本とする小区画だが、形態の判明するものは少ない。

郡条里遺跡では、調査区中央部付近に位置する。確認面は同様にⅢ層上面で、小畦畔のみの検出である。ここも近世以降の削平により状況は非常に悪く、疑似畦畔Bの最下部が辛うじて遺存しているのみで、区画内にも耕作痕跡はほとんど認められていない。小畦畔は東西3条、南北4条、区画は一辺2m前後の方形もしくは長方形の小区画で総数11区画である。なお、常代遺跡とは異なり、南北小畦畔の方向は北から西に30°程振れている。



第20図 常代遺跡古墳時代後期以降全体図 (1/2,500)



第19図 常代遺跡・郡条里遺跡位置図 (1/2,500)

②畠跡

常代遺跡の君津都市文化財センター調査区から3箇所の畠跡が検出されている。そのうち1号畠は時期不明、2号畠は奈良時代以降、3号畠は古墳時代後期後半～平安時代頃という時期が与えられている。

3号畠は東西方向に並行する浅い溝からなる。溝の間隔は1.2m程で、北側の3-1号～3-3号はほぼ同じ軸方向で再掘削を行っているようであるが、近世以降の削平が著しく遺存状況は不良である。また、この東側には区画溝と考えられる南北に伸びる溝(SD-313)があるが、区画溝はこの他には検出していない。

③利水遺構

常代遺跡から自然流路と取水堰、分水堰、水路が検出されている。

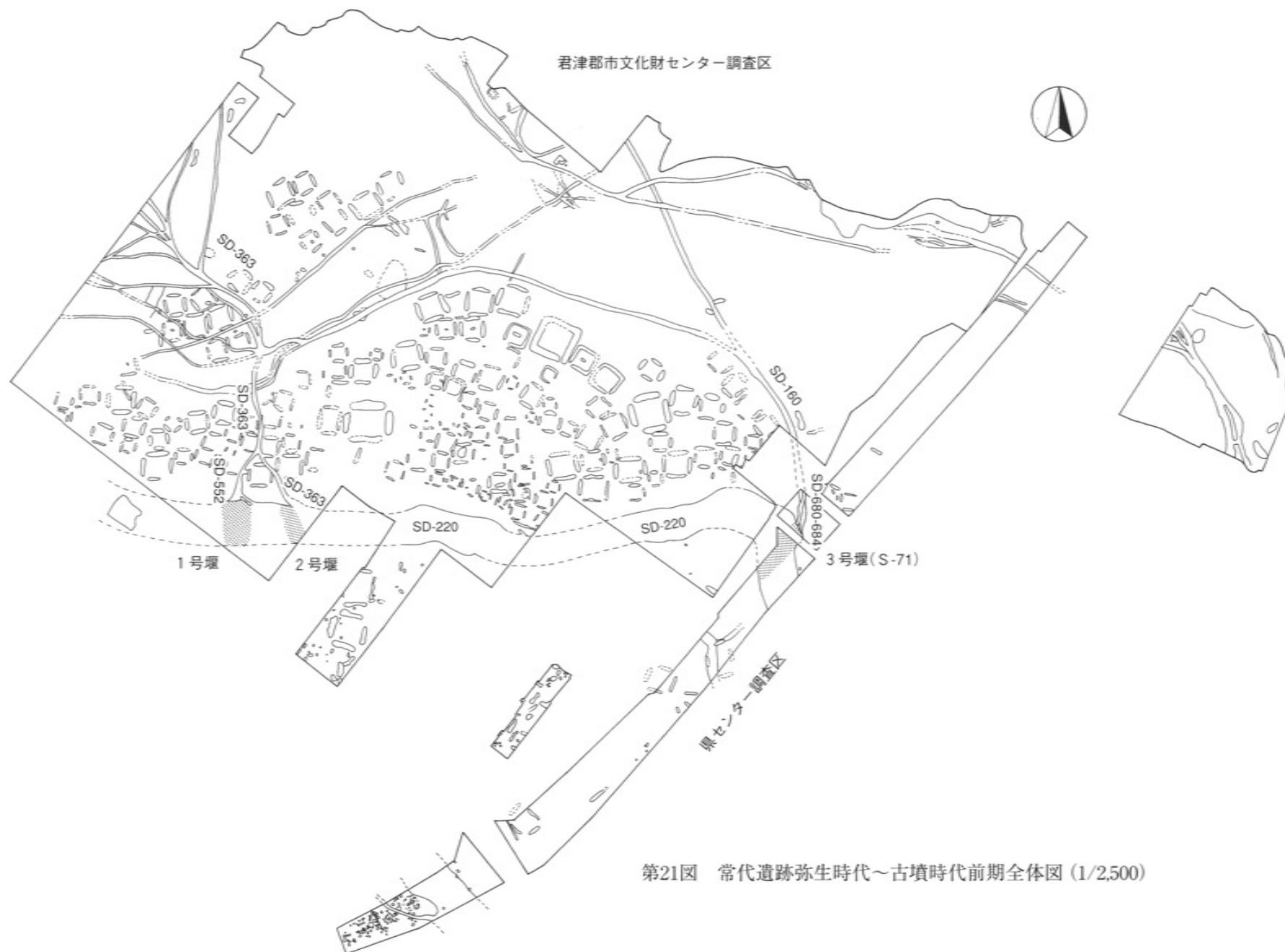
まず自然流路(SD-220)は小糸川の旧流路跡と考えられるもので、幅20m、深さ3.5m、長さ300mにわたって検出された。方向は北東→南西方向である。覆土はラミナの発達した比較的速い流水性の堆積である。河床～覆土中層にかけて弥生時代中期の遺物が多量に包含されており、弥生時代中期後半段階には洪水によってほぼ埋没したものと考えられている。

取水堰はこの自然流路に設置され、君津都市文化財センター調査区で1号堰と2号堰、県センター調査区にS-71の3箇所が確認されている。なお、君津都市文化財センターで仮に3号堰と報告されていたものが、S-71にあたる。流路から分岐する幹水路は、1号がSD-552、2号がSD-363、S-71がSD-680・684(SD-160)の各溝である。これらは弥生時代中期～後期初頭の時期が与えられているが若干の時期差が認められ、1号→2号→S-71の順となり、幹水路もこれに従う。規模は1号堰が幅4m×長さ8m以上、2号堰が幅4m×長さ5m以上、S-71が6m×長さ30mである。構造は堅杭と横木をかませて骨組みとし、網代を被せる形である。ただ、1号とS-71は堰本体の幅に比して横木が短いのに対し、2号は長い横木を堅杭で抱き込む合掌型である。堅杭に使用する材は、1号堰が角材を多用するのに対し、他では主として丸木を利用している。取水方向にも差がみられ、1号堰では流路方向にほぼ直角、2号堰では流路との角度がほぼ45°である。S-71は流路がやや湾曲する部分に設置されており、湾曲前の流路とほぼ同じ角度で伸びている。いずれも堰と幹水路の角度はほぼ等しい。

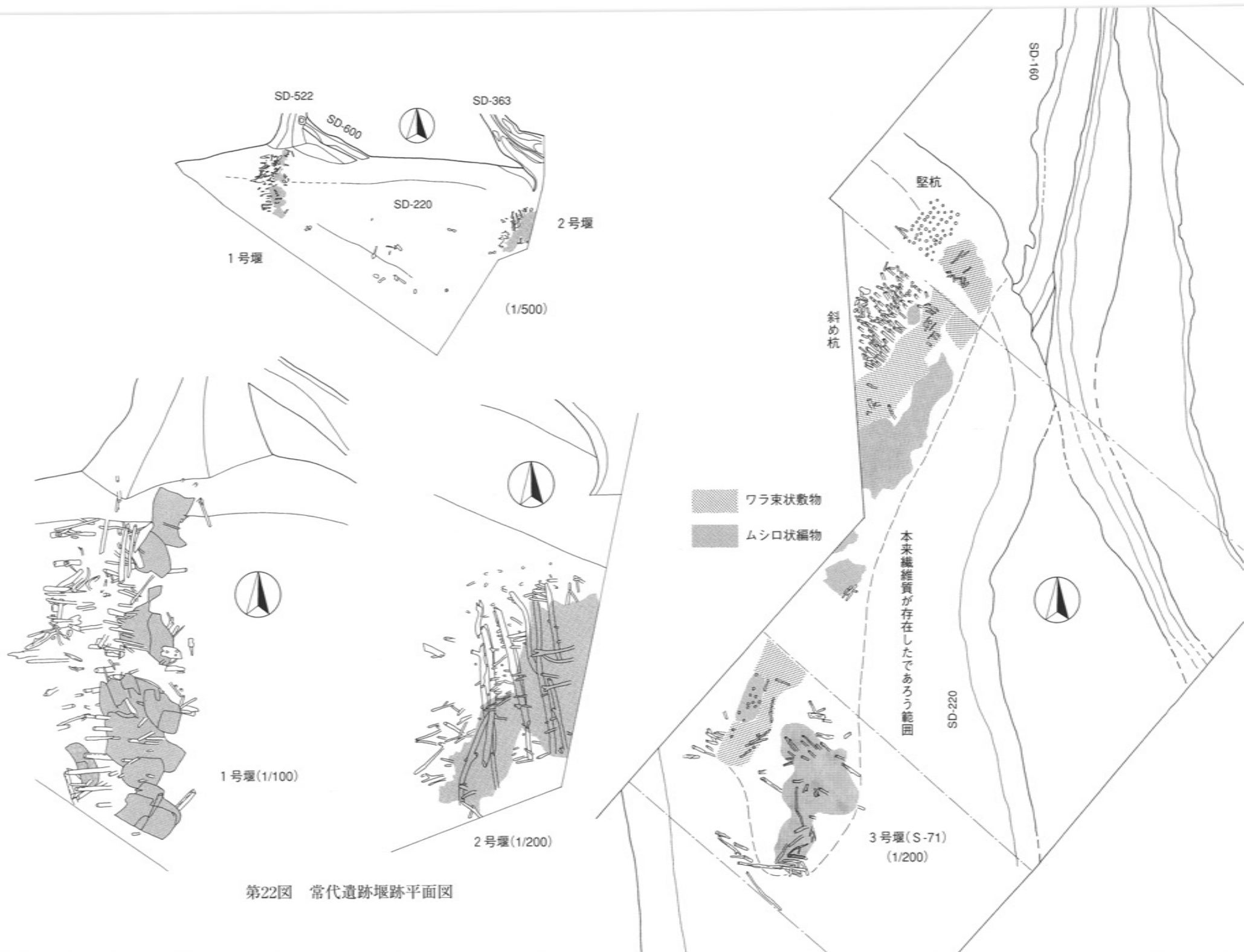
分水堰は君津都市文化財センター調査区のSD-160に検出されている。この堰はSD-160床面に直交する小溝と小ピットのみが遺存しており上部構造が遺存していないため、詳細な形態は不明である。ただ、その状況から板材と杭を用いた簡易な堰であったことを想定している。

このほか、君津都市文化財センター調査区では、SD-220の2号堰から延びるSD-363が調査区北西部で多数分岐している。これらの分岐部には特に堰などの構造は確認されていない。合計12条の枝水路が分岐しているが、SD-363の設置当初から存在していたものと、その後掘り直されたものがあるようである。

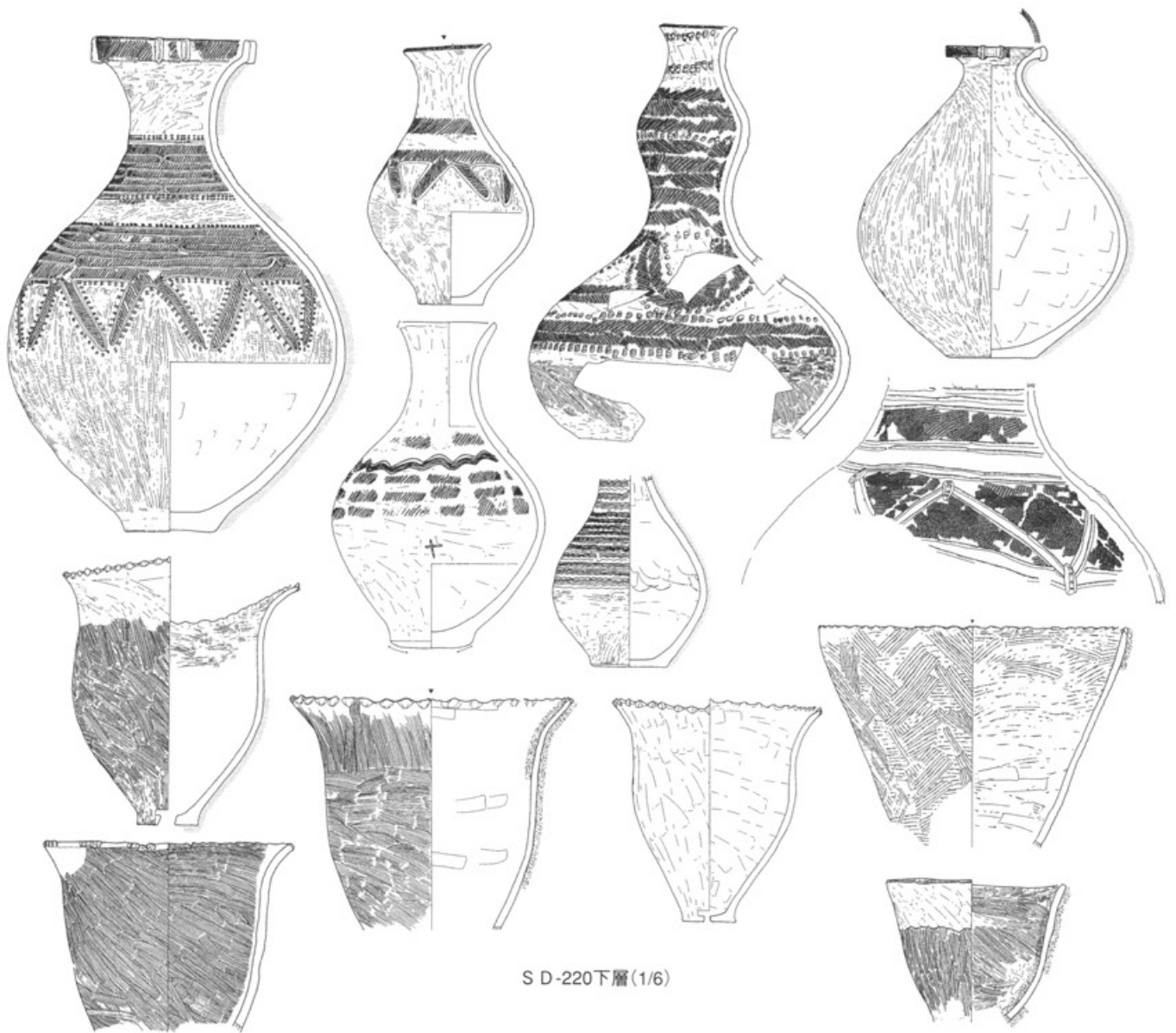
水路は多種多様なものが確認されているが、基本的にはすべて調査区の東→西へ流れていたような様相を示している。大きなものは調査区北部を東西に流れる溝群(SD-70・150)と南部を東西に流れる溝群(SD-369・370・380など)がある。このほかにこれらに規制されるように走る溝があるが、溝幅より大きい深さを持ち、断面が縦長の長方形を呈するもので、通称「小糸川タイプ」と呼ばれているものである。この小糸川タイプの溝は、水路状の溝群に沿うように、もしくは直交するように縦横に伸びて、それらの内部を区画するような様相を呈している。覆土は人為的な埋め戻しのものが多く、何度も再掘削を行った痕跡を残すものも少なくない。出土遺物や重複関係から古墳時代後期の時期が与えられている。



第21図 常代遺跡弥生時代～古墳時代前期全体図 (1/2,500)



第22図 常代遺跡堰跡平面図



第23図 常代遺跡出土遺物

(4)その他の遺構

前述のとおりさまざまな遺構が検出されている。

弥生時代～古墳時代前期の水田及び利水遺構に伴う集落跡はこれまでの調査では確認されていない。常代遺跡では総数160基を超える方形周溝墓群からなる墓域は水路によって区画されている。堰からの枝水路はそれ以前に形成された墓域を縫うように通って北西側調査区域外に流れるが、まとまった水田域はこの下流側にあるものと想定されている。ただ、県センター調査区からは断片的ながら小区画水田が検出されており、場合によると墓域Aと小糸川の現河道の間に比較的まとまった水田が存在した可能性がある。集落については、現在のところ推定しうる資料がない。

古墳時代～奈良・平安時代については多数の竪穴住居と掘立柱建物跡、調査区中央部やや南よりに、比較的規模の大きな円墳が確認されている。本遺跡は大きくSD-70・150とSD-369・370・380によって北部、東部、中央部、南部、西部に区分けされるが、集落域は北部と中央部に集中しており、小糸川タイプの溝は主として東部、西部にみられる。仮に小糸川タイプの溝が農耕に関連する遺構であるならば、集落域と生産域が水路を介して隣接する景観を復元することができる。

6. 高部古墳群

(1)遺跡の概要

高部古墳群は木更津市請西字西千束台に所在する。矢那川下流域南岸の東京湾を望む丘陵上に立地し、現地表の標高は40m～50mである。土地区画整理事業に伴って、平成4年度～平成6年度に君津郡市文化財センターが調査を実施した。調査面積は17,000㎡である。

検出された遺構は縄文時代早期、弥生時代後期～古墳前期初頭及び古墳時代中期の集落跡、前期と終末期の古墳、奈良・平安時代の集落や方形区画墓など多岐にわたる。

(2)基本土層

1層(黒褐色～黒色土層)、2層(新期テフラ)、3層(黒色～褐色土層)で、それぞれ更に細分されている。基本的には台地上の一般的な様相と大きく変わることはない。

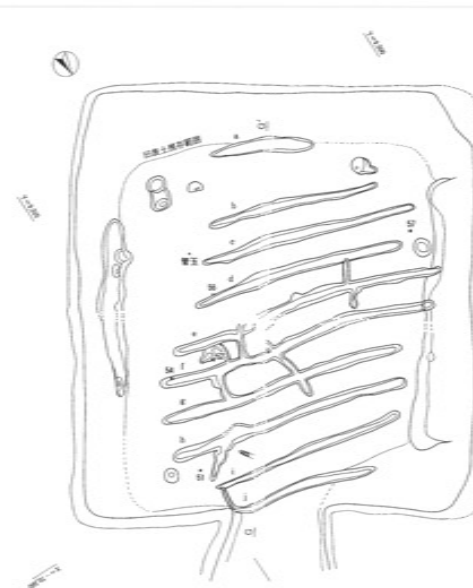
(3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は畝跡である。本遺跡では前方後方墳2基、円墳14基、方墳及び方形区画墓23基が確認されているが、畝跡は前期初頭と考えられる前方後方墳(30・32)と方墳(31)の墳丘下、旧表土上(1層上)より確認された。いずれも畝立溝と考えられる並行する浅い溝で、溝の間隔は1m～1.5m、溝幅は大多数が0.2～0.3m程度であるが、0.9m程のものもある。深さは0.2m～0.5m程と一定しない。軸方向は30号墳下が東へ35°、32号墳下が西へ45°～60°、31号墳下が西へ63°と若干のばらつきがある。覆土は黄褐色でローム粒を多く含む。溝床面には農具等の痕跡は確認できていない。

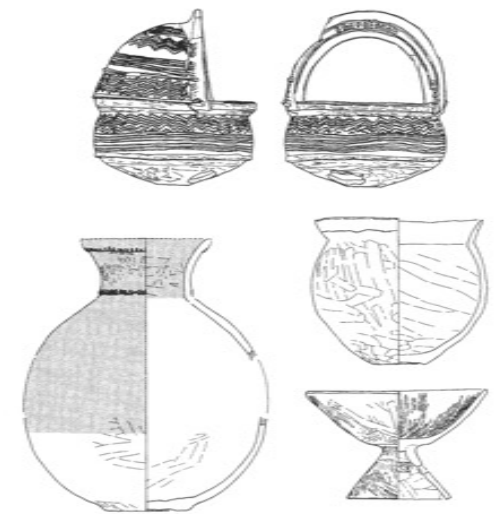
(4)その他の遺構

本遺跡の畝跡は古墳墳丘下での検出であり、区画溝などがいないため面積ははっきりせず、耕作域の限界も不明である。いずれの古墳も調査区やや北側の比較的平坦な部分に存在していることから、本来はこの部分に広く存在した可能性がある。

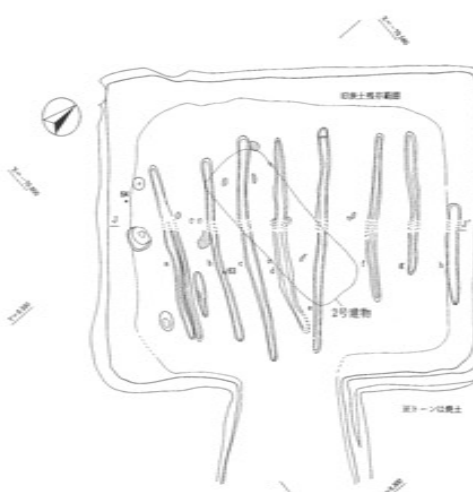
本遺跡は主として弥生時代後期～奈良・平安時代の集落、墓域である。検出された遺構のうち現在のところ前期古墳を除いた集落とその後の墓域に関しては未報告であるため、集落地と畝地との関連は不明で



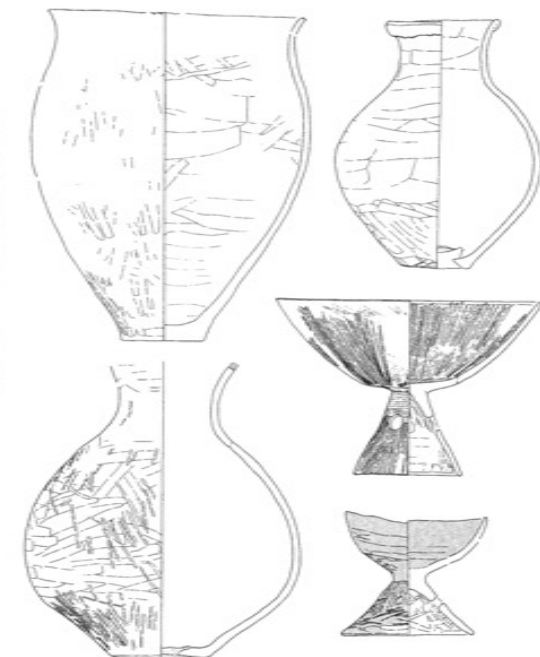
30号墳丘下畝状遺構(1/400)



30号墳周溝出土遺物(1/6)



32号墳丘下畝状遺構(1/400)



32号墳周溝出土遺物(1/6)

ある。ただ、全体図をみる限り、畠地と重なるようにして集落が占地している様子が伺えることから、恒久的な畑地ではなく、集落内に存在した比較的小規模な畠地であったのかも知れない。

7. 芝崎遺跡

(1)遺跡の概要

芝崎遺跡は匝瑳郡光町芝崎に所在する。九十九里平野の中央付近、下総台地に源を発し太平洋に注ぐ栗山川中下流域左岸の砂堆～自然堤防上に立地し、現地表の標高は2m～3m前後である。銚子連絡自動車道の建設に伴って平成11年度～平成13年度に東総文化財センターが調査を実施した。調査面積は約30,000㎡である。検出された遺構は縄文時代後期の円形竪穴、奈良・平安時代の集落跡と畠跡、中近世の掘立柱建物跡や道跡などである。

(2)基本土層

現代耕作土層、江戸時代層、室町時代層、古代耕作土層、砂礫層となっており、江戸時代層下部には宝永テフラ、古代耕作土層中に伊豆神津・新島系テフラ(AD.838年・AD.886年)、下部に天城カワゴ平テフラ(BC.800～BC.900)が挟在する。

(3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は畠跡である。本砂丘を覆う栗山川の氾濫起源と考えられる黒色土下部から調査区全面にわたって確認された。基盤層は砂礫層を覆う天城・カワゴ平テフラ上面である。幅約0.2m、深さ0.1m～0.2m、長さ20m～30mの溝が約0.7m間隔で数十条並行して掘り込まれており、畝立て溝と考えられる。また、この溝の床面には鋤もしくは鋤と考えられる耕作痕跡が認められるが、これは溝の幅によって2列もしくは3列に並んでいる。

区画ははっきりしないが、畝立て溝とは異って遺物を出土するやや幅広の溝があるようなので、耕地の区画は溝によって行われていたものと考えられる。

(4)その他の遺構

このほか、奈良・平安時代の竪穴住居跡や墓壇や中近世の掘立柱建物跡や溝、道路跡などが検出されている。このうち奈良・平安時代の竪穴住居跡は主に西区で確認されている。未報告であるため個々の遺構の新旧関係についてはまだはっきりしないが、この区域内においては畠跡と同時に存在したものはなく、畠が機能している段階の集落はややはなれた場所にあった可能性が考えられる。

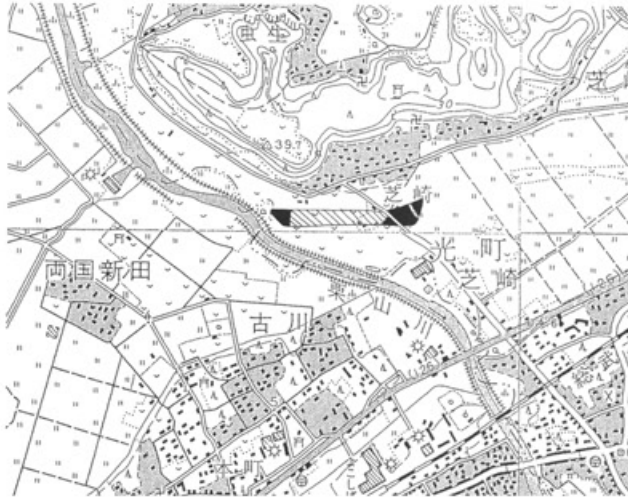
いずれにしてもこれまで県内では、本遺跡のような集約的な様相を示す畠跡は見つかっておらず、貴重な例といえる。

8. 西根遺跡

(1)遺跡の概要

西根遺跡は印西市戸神に所在する。印旛沼に流入する小河川である戸神川の氾濫原に立地しており、現地表の標高は4m前後である。千葉ニュータウン整備にかかる県道建設に伴って、平成11年度～平成12年度にかけて当センターが調査を実施した。調査面積は6,950㎡である。

検出された遺構は縄文時代後期の土器集積遺構、古墳時代前期以前の水路と井堰、奈良・平安時代の水路などである。遺物はおびただしい量の縄文土器のほか、奈良・平安時代の土師器・須恵器、農具を含む



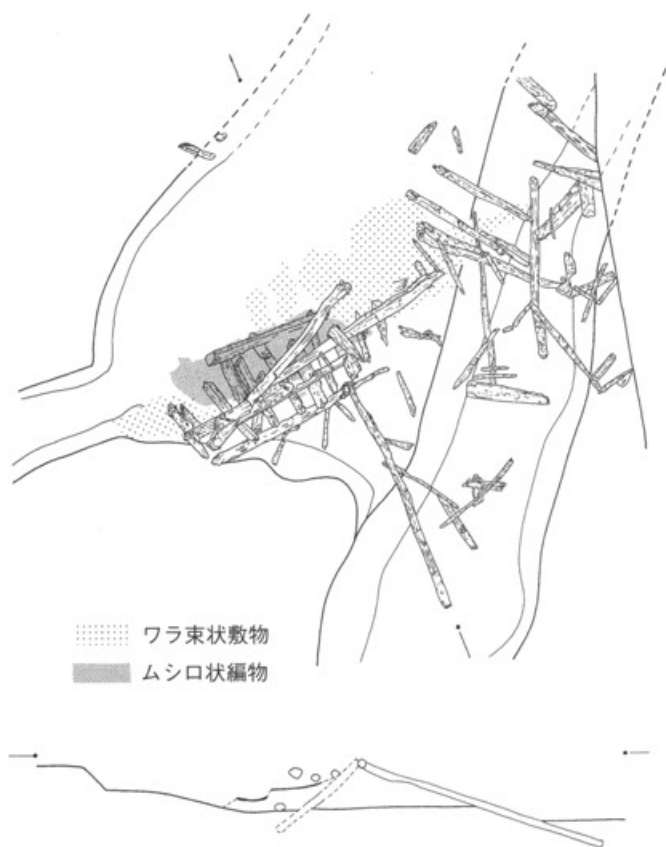
第25図 芝崎遺跡の位置 (1/25,000)



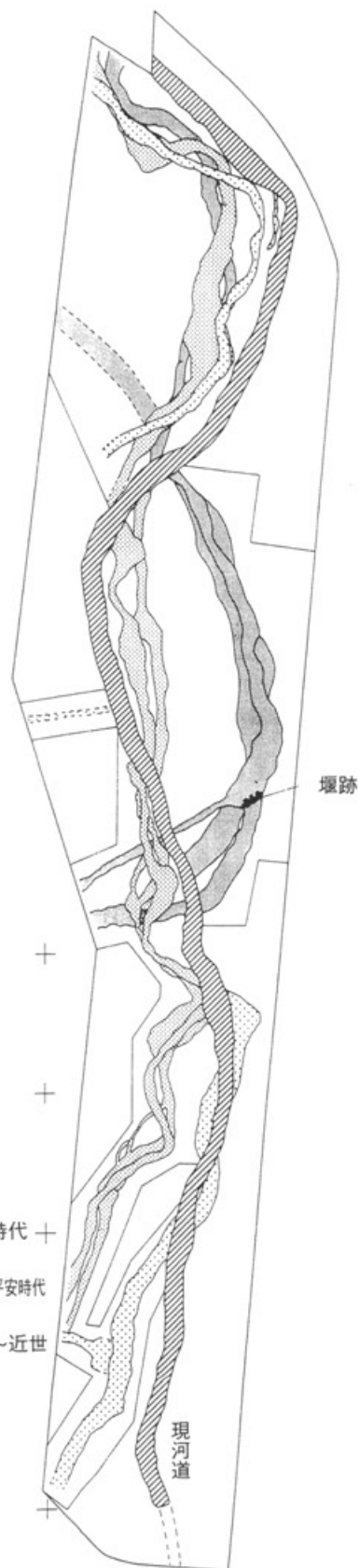
第26図 芝崎遺跡奈良・平安時代全体図 (1/1,000)



西根遺跡位置図(1/2,500)



西根遺跡古墳時代壙(1/80)



西根遺跡全体図(1/1,000)

多数の木製品が出土しており注目される。

(2)基本土層

未分解の植物質遺体を多量に含むシルト質もしくは泥炭質土壌で、いずれも戸神川の氾濫による堆積層と考えられる。また、その下部には埋没林が認められる。

(3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は自然流路と利水遺構(井堰、枝水路)である。

自然流路は縄文後期、古墳、奈良・平安、中世～近世の各時期のものが確認されており、それぞれの時期で複数の流路が見出されたものもある。いずれも戸神川の旧河道と考えられる。

井堰は調査区中央付近で確認された。新旧二段階に分けられる古墳時代流路の新段階に伴っており、そこから南西方向に枝水路を分流している。堰は、まず川床に縦もしくは斜めに杭を打ち、それに横木をかませて筵や藁束で覆ういわゆる「合掌型」の構造で、幅約5m、高さ約0.5mである。構造は常代遺跡1号堰と似るが、流路方向と直角ではなく、約45°程の角度をつけて設置されている。杭や横木はすべて建築材の転用で、横木には竪穴住居及び高床建物のもと考えられる梯子が使用されていた。

(4)その他の遺構

弥生時代以降では流路と利水遺構以外の遺構は確認されていない。奈良・平安時代の流路からは多量の墨書土器や農耕具のほか形代などが出土している。本遺跡兩岸の台地上、左岸が鳴神山遺跡、右岸が白幡前遺跡として調査され、いずれも古墳時代後期以降の大集落として知られている。この流路はそれらの集落の人々が祭祀空間として利用したものと推察される。

2 水田・畠跡と治水遺構について

1) 水田跡

水田跡は主として実際に耕作を行う水田区画とそれを囲む畦畔からなる。また大畦畔などに沿って水田に水を供給する水路や、一時的に貯水するための溜井戸、水路から水田面に水を引き込むための施設(水口や導水路なども)これに含めることができる。水田区画の田面には作業者の足跡や稲株痕跡など、大畦畔には心材や矢板、杭などによる補強が見つかることもある。

まず小区画水田であるが、他県の例では、広大な海岸平野などの沖積地に格子目状に配置された水路を大区画として、その内部を埋めるように碁盤目状に整然と小区画が配置されるもの、河川氾濫原など開析河川等に向かう緩斜面上に立地し、蛇行する河川の方向性を利用もしくはこれに規制された不規則な小区画からなるもの、もしくはその両者の性質を併せ持つものがある。前者の例としては静岡県登呂遺跡、道場田遺跡、曲金北遺跡、後者の例としては静岡県川合遺跡、大阪府池島・福万寺遺跡、青森県垂柳遺跡などが挙げられる。県内では市原条里制遺跡(Ⅲ2～3層)が前者の例にあたり、菅生遺跡(第7水田面)、芝野遺跡、長須賀条里制遺跡(A区下層・E区下層)が後者の例として典型である。また、この他に静岡平野で古墳時代中期以降に出現する中區画水田と呼ばれるものがある。

一方、大区画水田は一般に条里制水田とも呼ばれる。条里制とは中国周代の「井田制」に起源を持つとされる土地区画制度で、孟子が提唱したとされる。当時における実現性は疑問視されているが、1里四方の水田を「井」字形に9等分、中央の1区画が公用とし、周囲8区画を私用とするものである。わが国では『養老令・田令』(以下『令』)で規定されている。基本は109m間隔で東西南北軸に合致した坪畦畔(面

積は1町)を設定し、これを10等分するのだが、 2×5 に10等分する半折型と直接10等分する長地型が知られている。しかし、日本の国土は70%を山地が占めており、広大な低平地を必要とする条里制は地形的にも無理があったらしく、各地でこれに合致しない例も確認されている。特に洪水の多発する地域や、扇状地、河岸段丘や自然堤防を含む微地形の顕著な地域に多い。千葉県でも同様な傾向が認められるが、一般的に調査範囲が狭いため、坪畦畔を復元しうる例はほとんどない。

『令』は天平宝字元年(757年)に施行され、各地で整備されたとされている。奈良盆地では平安時代前期を遡る例はないという見解が提出されているが、近年、大阪平野や長岡京域では奈良時代に遡る例が検出されており、静岡平野でも奈良時代後期には実施されていたようである。

千葉県内ではこれまでに東京湾岸の房総地域の海岸平野及び河川氾濫原などの低地部を中心として比較的多くの検出例があるが、その大部分は中世以降のものであり、古代あるいは古墳時代以前にまでさかのぼる例は多くはない。イネは多くの栽培植物の中で珍しく優れた連作性をそなえた作物であるため、その主たる耕地である水田が継続して営まれることが多い。このことは房総半島のような隆起地形の環境下では、特に河川の氾濫などによる土砂の堆積がない限り、良好な状態で古代以前の水田が遺存していることは難しいのであろう。また、比較的古い時期の例であっても、推定される水田域と比較して調査面積が小さいため、全容を把握しうるものはない。

2) 畠跡

一般に畠地は水田におけるイネとは異なり、継続して同一作物を作り続けると連作障害により、収穫量が極端に低下する。その原因には、まず土壤養分(特に窒素)の蓄積を上回る収奪による地力低下、病害虫の集団発生などが挙げられる。これを回避するため、農薬が普及するまでは同じ畠で季節によって異なる作物を栽培したり、一定期間耕作を放棄し地力回復をはかる方法、もしくはこの両者の併用、更に中世以降では水田と畑の転換なども行われるようになる。そのほか、山林の一部を定期的に焼き払い、その跡地を耕地として数年間利用したあと、地力低下を起こすとまた別の場所を同様に開墾し、これまでの耕地は山林にかえすという、いわゆる焼畑と呼ばれる方法もある。

畠跡は通常、畝立溝と解釈されている並行する浅い溝及びその境界を区画する比較的深い溝の両方、もしくはそのいずれかによって認識されている。県内では旧上総地域を中心に、丘陵あるいは台地上、砂丘ないし自然堤防などの低地部分まで、地形的には比較的広い範囲で確認されているが、例そのものは多くない。特に丘陵もしくは台地の例は古墳墳丘下の旧表土上に検出される例が殆どを占めるため、水田跡よりも更に断片的である。これらの例は検出状況からみてほとんどが弥生時代後期～古墳時代後期と推定され、複数地点で畠跡が認められるものについても溝の軸方向に偏差が認められること、台地もしくは丘陵平坦面の規模と集落との関連からみて、いずれも集落に付随する比較的小規模な畠と推定できる。一方、芝崎遺跡における奈良・平安時代の大規模な畠跡は、これまで県内に例のない集約的な耕地経営の様子をうかがうことができる。作物については不明だが耕作土の科学分析(花粉やプラントオパールなど)でこれが判明した場合、当時の畠の耕作の様子が復元できるかもしれない。

3) 治水遺構

治水遺構には水路、配水遺構、貯水遺構がある。

まず水路は、文字通り水が流れた、若しくは水を流した遺構の総称である。人為的に掘削したと考えられるものの他、自然の小川を改変したと考えられるものも含まれ、多くは比較的規模の大きい溝状遺構として認識されている。半島南部の低地域を中心として県内ほぼ全域から知られているが、農耕に伴うものかそれ以外の用途かがはっきりしないものが多い。また「溝」という遺構の性格上、時期を特定できないものがほとんどである。

配水遺構は、基幹となる水路から何らかの手段を用いて、取水もしくは排水するための施設である。これには、基幹となる水路から別方向に開削された枝水路、井堰・分水堰、樋などが挙げられる。枝水路は比較的多く確認されているが、堰、木樋は少なく、数例を数えるのみである。貯水遺構は、用水の確保が比較的困難な場所でこれを解消するための施設であり、溜井戸、溜池などがこれに含まれる。溜井戸に関してはこれも低地部を中心に確認されているが、古代以前のものは多くはない。なお溜池に関しては、これまでのところ県内で古代以前にさかのぼるものは確認されていないようである。

第3章 木製農具の変遷と若干の問題

大谷 弘 幸

1 木製農具出土遺跡の概要

千葉県下の木製農具研究の幕開けは、木更津市菅生遺跡の発見に始まる。その後木製農具の発見事例はあまり増えることなく長い年月が経過することとなった。ところが1980年代以降低地部の調査例が増加し、それに伴って木製農具の出土数も増え、弥生時代以降奈良平安時代に至るまでの各時期の木製農具がおおむね出土するに至った。本節では県内で出土した木製農具を遺跡ごとに集成し、出土状況や農具の構成などについて概要を述べることにする。なお、旧来農具の範疇で捉えていた鍬や鋤について、「農耕具」としての性格よりも「土木具」的な使用方法の側面が強いものもあるとの指摘がなされている¹⁾。実際農具とされるものの多くが土木具としても使用されることはまぎれなく認められることであり、木製品のみから農具的な側面が強いものと土木具的な側面が強いものとを峻別することは現時点では困難であると言えよう。今回の集成作業においては、鍬や鋤に土木具的な側面があることを念頭に置きつつも農具の範疇としてまとめることとした。

集成は基本的に遺跡を単位として行い、主たる木製農具の帰属時期に沿って掲載することとした。掲載したものは、耕起具として鍬、鋤、掘り棒、補助具として田下駄、大足、収穫具として鎌、穂摘具、調整具として臼、杵、ツチ類などであるが、同一遺跡から同形式の木製品が多数出土している場合には全体の形状が明らかなもののみを図示した。なお、農耕に使用された道具としては本来、箕や籠、田舟などの運搬具も含められるが、今回の集成では除外した。また、出土遺構については第2章第1節「農耕関連遺構の概要」の項で取り上げた遺跡と重複するものが多いため割愛した。集成図に紹介したものの中には、正式な報告書の刊行がまだ行われていないものが含まれており、これらは実測原図を元に推定しトレースしたもので、細部については事実と異なる場合がある。

資料集成の結果、14遺跡（別の時期を含む）から木製農具が出土していることが明らかとなり、内訳は弥生時代中期3遺跡、古墳時代前期6遺跡、古墳時代中期から後期初頭1遺跡、古墳時代後期3遺跡、奈良平安時代5遺跡である。

1. 常代遺跡（第34～38図） 君津市常代字五反歩に所在する。小糸川左岸に面した標高約16mの低位段丘上に立地している。弥生時代中期から奈良平安時代を中心とした墓域・集落遺跡である。木製農具の大半は遺跡を東西に流れる弥生時代中期の自然流路（S D-220）から出土している。この自然流路には堰が設けられており、周辺に展開していたと思われる水田に用水を供給する基幹水路の役割を担っていた。また、木製農具のほかに工具の柄や容器、建築材の類も多く出土している。図示した1から67までがS D-220からの出土である。

直柄平鍬には着柄隆起を持つもの（1～12）と持たないもの（13～18）がある。このうち着柄隆起を持つものには柄穴の両側にヒレ状の突起を作りだしているものがある（1～3・6）。また、6のように背面上部に刃部方向と平行した稜を持つものがあり、泥除けなどの装着も想定されるが、実際に泥除けの出土は見られない。直柄股鍬には、3本、4本、5本、6本歯のものが見られ、歯の本数の少ないものは三

角形(24~26)、歯の本数の多いものはカマボコ形(19~23)の身部を持つ傾向が見られる。いずれも着柄隆起は作られていない。このほか27のようにエブリと考えられる横鋏が出土している。着柄隆起を持つ直柄平鋏の未製品は28~33である。これら未製品によると、ミカン割りにした板材を着柄隆起部分を帯状に残しながら周りを成形し(28・29)、ほぼ外形が出来上がった時点で分割し(30~32)、最終的に柄穴を開ける(33)工程が復元できる。なお、一度に数点以上が同時に製作され、荒削りが終了した段階で2連程度に分割し、さらに最終段階に近くなって単体に分割して作業をしたものと思われる。35~38は着柄隆起を持たない平鋏の未製品であろうか。用材としては、身部は14がクヌギ節であるのを除いてすべてアカガシ亜属であり、柄にはヤマグワ、ムクロジ、サカキが使用されている。

鋤は一木のもののみが出土している(39・40)。40は握部の上端をフック状に作り出しているものである。いずれも用材はアカガシ亜属である。田下駄は2点出土しており、足を固定する紐通しの穴が4つ開いている。41はヒノキ、42はクスノキ製である。

竖杵の出土量は多く、すべて握部にソロバン玉状の突起を持っている。搗き部先端は丸く半円形を呈するものと、一方のみが平らになっているもの(43・46)が認められる。木取りは割材を加工したものと丸木を使用したもの(46・54・55)がある。用材は44がクヌギ節である以外はすべてアカガシ亜属である。横杵は未製品を含めて4点出土している。すべてアカガシ亜属製である。ツチ類は横方向に打面が見られるヨコツチ(61~63)と搗き部が釣鐘形を呈し木口面に打面が見られる「タテツチ」(64・65)があり、「タテツチ」はヒイラギ製である。臼は小形のもので、搗き部は半球状に磨滅している。

このほか68と69はS D-70からの出土で古墳時代後期の所産である。69はムクロジ製の鎌柄で、頭部とグリップ部は刃部方向にむかって突出している。鉄鎌装着の穴の角度は柄に対してほぼ直角で、直刃または基部が直刃で先端が大きくカーブするタイプの鉄鎌が装着されていたものと思われる。

2. 浜野川遺跡(第39図) 千葉市緑区南生実町に所在する。東京湾に流下する浜野川に面した標高約6mの沖積低地上に位置している。浜野川遺跡群、浜野川神門遺跡、神門遺跡として報告されている遺跡である。木製農具は遺物を包含した堆積層から出土している。1から3はケース4の弥生時代中期遺物包含層からの出土で、いずれも着柄隆起を持つ直柄平鋏の未製品である。常代遺跡の場合と同様に着柄隆起部分を帯状に残しながら周辺を成形し、その後切断して柄穴を開ける工程が復元できる。1はその長さから3個体程度連結して製作された可能性が考えられる。用材はすべてアカガシ亜属である。4はアカガシ亜属製の曲柄鋏である。いわゆる「東海系」の鋏で、肩部は斜めに削り落とされ軸部先端には紐掛け用の溝が巡っている。この鋏はケース2のⅣa層から出土したもので、同層付近では奈良平安時代を中心に弥生時代中期から中世にかけての遺物が混在して出土しており、4にもっと近接して出土したものは、底部回転糸切り無調整の土師器坏であった。また、この鋏よりも下位のⅣb層からは6が出土している。6は楕円形の曲物を転用した輪カンジキ型田下駄の横木である。これらのことから4の曲柄鋏は奈良平安時代の所産である可能性が高いと言える。5は膝柄である。緊縛部上部に紐掛け用の突起が作り出されている。奈良平安時代に相当する5層からの出土であり、イヌガヤ製である。

6と7は輪カンジキ型田下駄、9から11は杵型大足の部材、8はヨコツチであろうか。いずれも奈良平安時代の所産である。

3. 長須賀条里制遺跡（第39図） 館山市下真倉字軽ノ坪に所在する。鏡ヶ浦に面した標高約7mの沖積低地上に立地している。1は弥生時代中期の溜め井施設と思われるE区SX1から出土した、着柄隆起のある直柄平鍬の欠損品である。常代遺跡のものと共通する柄穴両側のヒレ状突起が認められる。2と3は古墳時代前期から中期にかけての溝E区SD1から出土した膝柄鍬の未製品である。両者共に外形を大まかに整えた段階のもので軸部や刃部の加工は行われていない。報告書は刊行されていないため詳細は不明である。

4. 国府関遺跡（第40～50図・写真図版5上段） 茂原市国府関字中橋に所在する。豊田川の支流に面した標高約18mの微高地上に立地する。古墳時代前期初頭の集落と墓域・自然流路を検出し、自然流路からは古墳時代前期の土器類と共に木製品が多数出土した。出土した木製品には、農具のほか工具や容器、建築材、祭祀用具など多様な種類が認められる。

直柄平鍬は9を除いてすべて着柄隆起を伴っている。これらは平面形が台形で刃部の幅が広く、着柄隆起の先端に刃部と平行する稜線を持つもの（1～7）と、この稜線が無く刃部の幅が狭いもの（8・10・13）とに大別することができる。また稜線を持つものには上部の2か所に穴が開けられているもの（1～3・5・7）や上端部に菱形の突起を作り出しているもの（1）が見られる。これらは泥除けなどを装着する際に使用されたものと考えられる。9は着柄隆起を取り除き他のものに転用したものとも考えられるが、全体に薄く仕上げられていることなどから泥除けの可能性もある。35から48はおもに直柄平鍬の未製品である。37のように外形がほぼ整うまで2点を連結させて製作する例は少なく、初期の荒割り段階で単体に切り離して後、着柄隆起を含めた細部の加工を行っていたようである。このため、36のように曲柄鍬と連結して荒加工が施される例も見られる。直柄股鍬は1点出土しており（11）、4本歯で身部が台形を呈している。12はエブリで刃部は鋸歯状をしている。14と15は着柄隆起下端の刃部が挟れている「横鍬」である。この鍬は、刃部の挟れのほか着柄隆起側に身部全体が内湾する特徴がある。また、身部側面が大きく開くもの（14）や身部側面が股鍬状に加工されているもの（15）がある。この身部側面の形態から諸手鍬的な機能も想定されるが、柄穴の方向性から考えて横鍬の範疇で考えたい。なお、これら直柄平鍬の身部はすべてアカガシ亜属製である。また、5の直柄はヤマガワ製13の直柄はアカガシ亜属製である。

曲柄鍬には二股鍬（17～24）、狭鍬（25～32）、多股鍬（33・34）が見られる。これらの曲柄鍬は共通して軸部と肩部との境に明瞭な段をもち、肩部は斜めに削られ、刃部の裏面は段を残して薄く仕上げられている。また、軸部先端には紐掛け用の溝または突起を作り出している。いわゆる「東海系鍬」の特徴を示すものである。二股鍬はすべて身幅の最大幅が刃部下位にあって下膨れ型をしている。軸部先端の紐掛け部分には、溝状のもの（17～20）と突起を作るもの（22～24）がある。狭鍬は肩部からやや開きながら先端に向けて直線的に作られている。刃部先端は丸みを帯びたものが多く、27や29のように平らな刃部をもつものもある。軸部先端の紐掛け部分には、溝状のもの（28・30・32）と突起を作るもの（25～27・29・31）がある。多股鍬はすべて4本歯のもので刃部は長い。曲柄鍬の未製品は50から65である。軸部の荒成形まで2点連結して製作しているもの（52～54）と比較的初期の段階で切り離し単体で製作するもの（59～63）がある。なお、61は他のものに比べて厚みが薄いため鍬の未製品とすべきか疑問が残る。樹種はすべてアカガシ亜属である。

鋤は一木のもので、身が二股になるもの(68)や、三股になるもの(66)、スリットのはいるもの(70)がある。握部はU字型の窓が開くもの(66・71・72)とT字型になるもの(67)、T字型を呈し軸部との接合部に平たい面を作り出すもの(73)とバラエティーがある。74は鋤または櫛状木製品の未製品である。用材は67がクスギ節、71がトネリコ属である以外はすべてアカガシ亜属である。75から85は掘棒と考えられ、割板材を使用したもの(75~80・82)と丸木を使用したもの(81・83~85)に分けられる。割り材使用にはさらに三角形の刃部をもち、刃部がスプーン状に内湾(75・78)または内湾し段を作るもの(76・77)と靴べら状に平坦面を作るもの(79・80・82)がみられる。82が両端に刃部を作るほかは片方のみに刃部を作り、グリップ端部は77以外単に丸く仕上げているのみである。樹種は80がクスギ節であるほかは、すべてアカガシ亜属である。丸木使用には両端をヘラ状に加工したもの(84)と片方のみ加工しもう一方は端部を丸く削ったもの(81・83・85)があり、樹種はイヌガヤ(81・84)、アカガシ亜属(83)、アオキ(85)と様々である。

86から108はすべて膝柄であり、このうち96・97・104は未製品である。緊縛部上部には紐掛け用の突起が作られているほか先端部にも同様の突起を有する例(89・108)が認められる。樹種としては94がスダジイ、102がヒサカキである以外はすべてサカキが使用され、膝柄作成にあたって樹種選定が徹底されていたことを窺わせる。

鎌柄は5点出土し(109~113)、このうち112は未製品である。112以外は柄端部にグリップエンド状の突起をもたない。また、109から111は柄端部が刃部方向に湾曲している。頭部は刃を押さえるために張り出している。鉄鎌挿入用の穴には鎌を固定するための板材が残っているものがある(109・110・113)。鉄鎌の装着角度を見ると、109と110・113の3点は柄に対して直角に近い角度で、直刃鎌などの装着が想定される。111は柄に対して内傾し、かなり鋭角に鎌が装着されていたことを示している。樹種はケヤキ(109)、クマノミズキ類(110)、カエデ属(111)、グミ属(112)、ヤマグワ(113)と一定しない。一木の木鎌が3点出土している(114~116)。外形上は鎌とよく似ており片刃である。この木鎌については3点のうち2点が刃部の形態から左鎌と考えられることや、柄との角度がかなり鋭角になることから鎌としての機能に疑問が示されている。しかし、上述の111も着柄角度が鋭角になることを考えるとやはり鎌の範疇で捉えた方が自然であろう。また、製作上多くの加工痕を残していることから祭祀具と考えるより実用品であつと考えられる。その使用方法としては稲の根株を切断するには不都合であり、収穫具としての機能以外の機能、たとえば周辺の草や水草などを集めるような機能なども視野に入れて検討すべきであろう。樹種はクスギ節(114)、アカガシ亜属(115)、アオキ(116)と一定していない。

竖杵は握部にソロバン玉状の突起を作るもの(117)、握部と搗き部との境が明瞭なもの(119・121~126)、握部と搗き部の境が不明瞭なもの(118・120・127・128)に分類できる。搗き部の先端は半球形を呈するものと平坦なものがあり、用材は丸木を加工したものと割材を使用したものがある。ヨコツチは搗き部と握部との境に明瞭な段が作られるもの(129~131)と段が明瞭でないもの(132~137)がある。「タテツチ」は釣鐘形の搗き部と端部にグリップエンド状の突起をもつ握部からなっており、樹種は138がサカキ製のほかはヒイラギ製である。

5. 村田服部遺跡(第50図) 千葉市中央区村田町に所在する。東京湾に流下する村田川河口付近の標高約2mの沖積低地上に所在する。調査では明確な遺構は検出されなかったが、古墳時代前期の包含層か

らツチ類1点が出土した。あまり胴の張らない釣鐘形を呈しており、軸部先端がグリップエンド状に突起を作っている。使用面が横方向であるのか縦方向であるのか判断しにくいもので、同様のものは浜野川遺跡(8)や五所四反田遺跡(35)でも出土している。樹種はカシ類である。

6. 西根遺跡(第50図) 印西市戸神字棚田に所在する。印旛沼に流入する戸神川が形成した標高約4mの沖積低地に位置する。戸神川の旧河道中から古墳時代前期の堰が検出され、それに伴って木製品が出土している。なお、報告書が刊行されていないため出土状況などの詳細は不明である。1は一本鋤で握部には半円形の窓が開けられ、身の肩部近くの両側面には三角形の刻みがみられる。また、刃部に近いところ2か所に円形の穴が開いている。2の堅杵は握部との境が明瞭なタイプで割材を使用している。3は丸木を利用した「タテツチ」で、握部と搗き部の間に大きな段が作られている。

7. 芝野遺跡(第50図・写真図版4下段) 木更津市下望陀字芝野に所在する。小櫃川下流左岸に形成された標高約12mの自然堤防上に位置する。古墳時代前期の溝S D45から木製品が出土している。木製品が出土したのは東西に流れる溝の南側に張り出した溜め井状の施設からで、この施設は周囲を板と杭で補強しており、中から曲柄鋤未製品が出土した。このことから、いわゆる木器の水付け施設と考えられる。なお、この遺構からはS字状口縁台付甕が出土している。1は荒削りの段階で単体に切り離されたもので、2は軸部の外形が整えられた状態でも2個体連結して水付けしていたことがわかる。

8. 五所四反田遺跡(第51～53図) 市原市五所字四反田に所在する。東京湾に面した標高約3mの海岸砂丘帯上に位置している。報告書は未刊のため詳しい出土状況は不明である。古墳時代前期の井戸状遺構52号跡から直柄平鋤が1点出土している(1)。この鋤は着柄隆起の先端部に稜線を作り出し、肩部には2か所で紐通しの穴をもち、上端部に菱形の突起を作っている。国府関遺跡出土の直柄平鋤(1)と極めて似た形態をとっているが、若干本遺跡のものは小振りである。樹種は身部がアカガシ亜属、残存していた直柄がニシキギである。

五所四反田遺跡で最も多く木製品が出土したのは、古墳時代中期から後期初頭の大溝(2号跡)である。この遺構からは農具のほか容器や建築材、祭祀具などの木製品が多数出土した。2から10と12から16は「横鋤」である。国府関遺跡の項でも述べたような観点から「横鋤」として扱うこととする。五所四反田遺跡からはこの「横鋤」が多数出土し、際だった特徴となっている。柄穴が方形のもの(2～8・15)と円形のもの(9・10・12～14・16)に大きく分類される。また、側面の形態では右側面が二股にわかれるもの(15)や左右の一方が大きく開くものに対してもう一方が台形に加工し、長さ形態共に左右非対称になっているもの(2・3・5・7・8・14・16)がある。27はこの鋤の未製品で、長方形の材を削り込んで着柄隆起と内湾する刃部を作り出している。この段階では側面の加工は行われておらず、最終的に柄穴と刃部の挟り、側面の調整が行われたと考えられる。樹種はすべてアカガシ亜属であり用材の選択が徹底されている。11は横鋤である。17のエブリは着柄隆起をもたず刃部は鋸歯状を呈している。25と26は着柄隆起の先端に稜をもつタイプの直柄平鋤未製品である。形態的には古墳時代前期に属する国府関遺跡や五所四反田遺跡52号跡出土のものと共通しており、この形式の鋤が古墳時代中期から後期初頭にかけても存続していたことを示している。25を見ると着柄隆起や隆起先端の稜までも大まかに製作している段階まで2

点連結しており、初期の段階で単体に切り離して加工を行う国府関遺跡の状況とは異なっている。

曲柄鍬には二股のもの（18～20）や5本歯のもの（21）、スリットの入ったもの（23）がある。二股のタイプには肩部がなで肩で斜め方向の削りがある形態（18）と肩部と軸部との境が直角に近く段をなしている形態（19・20）があり、いずれも軸部の先端には紐掛け用の突起または溝が作られている。21の多股鍬には肩部中央に機能的とは思われない三角形の浮き彫りがみられる。22は身部の平坦面が長いことため狭鍬の可能性もある。23はスリット入りの鍬である。曲柄鍬にスリットを入れるのは長野県から北陸、北関東に特徴的なものであり、南関東においての出土例は他になく、この形式の南限を示すものと言えよう。なお、24は軸部の断面形が円形であり、軸の長さも長いことから菅生遺跡で出土しているフォーク状の木製品（16・19・20）との関連も考えられる。樹種はすべてアカガシ亜属である。

農具柄としては直柄（28）、膝柄（29・31）、反柄（30）が出土しており、反柄はムクロジ製であるが膝柄は2点ともサカキが使用され、国府関遺跡の状況と似ている。30の反柄には柄と緊縛部との境に紐通し用の穴が開けられている。

鋤は1点出土しており一木の二股鋤である（32）。握部には三角形の穴が開けられている。アカガシ亜属製である。33は輪カンジキ型田下駄の足板または横木であろうか。亜字形をした板材である。ケンボナシ製である。

堅杵（34）は握部と搗き部との境が明瞭ではなく、握部にソロバン玉状の突起は認められない。割材を使用したアカガシ亜属製である。ツチ類はヨコツチ（35～37）があるが、35は使用方向が縦であるか横であるか判然としない。アカガシ亜属製である。36と37は搗き部と握部に明瞭な段が作り出されたもので、36がヒノキ製、37がアカガシ亜属製である。「タテツチ」38はやや肩の張った釣鐘形を呈し、握部の先端にはグリップエンド状の突起を作っている。ヒイラギの丸木を使用したものである。

39に示したものは長刀状の形態をもったもので、明らかに農作業に使われたものと断言できないが、長く伸びた雑草や残桿を薙ぎ倒すには有効なように思われる。クヌギ属製である。40も農具と言えるかどうか不明であるが、ヘラ状を呈しており掘り棒の一種とも考えられる。ムクロジ製である。

9. 菅生遺跡（第53～55図） 木更津市菅生字長町に所在する。小櫃川中流左岸の自然堤防上および沖積低地に立地する。2の小型の直柄平鍬が弥生時代の遺物包含層出土とされる以外は、大方が古墳時代後期の大溝からの出土である。大溝からは農具類のほか容器や紡織具、建築材などが出土している。

1は着柄隆起をもつ直柄平鍬で身の長さが比較的長い。3は「横鍬」としたもので、着柄隆起の下端部に挟りがみられ、側面は左右非対称に作られている。このタイプの鍬が古墳時代を通じて存在していたことを示す資料といえる。21から23は直柄平鍬の未製品である。いずれも着柄隆起を伴わないタイプのもので、22と23にみるように大まかな外形ができた段階で単体に切り離していることがわかる。また、22からはかなり早い段階で柄穴を開けることがわかり、それまでの直柄平鍬の製作工程では柄穴を開けるのが最終段階であることと対照的である。

曲柄鍬はいわゆる「ナスビ形鍬」が主流を占めている。4と5はナスビのヘタ部分が明瞭に作られているのに対して、6と9は軸部に突起として残っている。軸端部には紐掛け用の突起または溝が作られており、軸部先端の裏面が一部削られ段になっているもの（4・5・9）がある。また、4と6は刃部先端の幅が一段狭くなっており、U字形鍬鋤先が装着されていたものと考えられる。11は軸部にヒレや突起など

をもたない鍬で、東海系曲柄鍬に類似する。16と18から20はフォーク状の木製品で、18を除き軸部の断面形は円形である。鋤のような握部が付く可能性も考えられる。刃部は二股（18）、3本歯（16・19）、5本歯（20）のものがある。

反柄が1点出土している（29）。完形のもので緊縛部の先端には紐掛け用の突起が作られ、柄の端部にはグリップエンド状のコブが付いている。

鋤（24～26）はすべて握部に半円形の透かしが入るもので、26は下端部に段が作られていることから組合せ鋤であろうか。これに伴う身部は出土していない。27と28は一木の鋤になるものであろうか。

田下駄が1点出土している（30）。縦型のもので鼻緒穴が3か所開いている。先端の鼻緒穴がよっており、左右を履き分けていたものである。31は杵型大足の杵木であろう。鎌柄は2点出土している（32・33）。柄部の断面形は共に円形で柄部上端と下端に突起が作られている。

堅杵には握部にソロバン玉状の突起をもつもの（34・35）と握部との境が不明瞭なもの（36～39）があり、搗き部の状態では平らなものと半球状を呈しているものに分けられる。ツチ類ではヨコツチと「タテツチ」が出土しており、ヨコツチでは握部と搗き部の境に明瞭な段差をもつもの（40～42）と不明瞭なもの（43）がある。「タテツチ」の44は搗き部との境が緩やかに作られている。

10. 郡遺跡（第55～56図） 君津市郡字下赤磯に所在する。江川左岸に面した標高約17mの低位段丘上に立地している。木製品は複雑に入り組んだ溝から出土したもので、7から9と11の4点が古墳時代前期の可能性があるとされるが共伴する遺物はない。1・3・4・6・10・12・14・15・16の9点はS D 451とS D 469から出土したものであるが、両遺構は本来同一遺構であり共に古墳時代後期の所産である。これ以外のも木製品も古墳時代後期のものと考えられる。

古墳時代前期とされる7は横鍬様のものであるが、着柄角度から考えて泥除けの可能性もある。8は直柄平鍬の未製品で着柄隆起部分を高く残した段階で単体に切り離している。9は曲柄鍬の未製品と思われる縦方向に割れている。11は櫛状の木製品であるが掘り棒的な機能も考えられる。国府関遺跡からも同様なものが出土している。すべてアカガシ亜属製である。

古墳時代後期のものは、12点図示した。曲柄鍬はナスビ形のものが認められる（4・3）が、ナスビのヘタに相当する部分はあまり発達していない。また、紐掛け用の突起の裏面は削られて段が付けられている。1と2は荒い加工痕が残るため未製品の可能性もある。5と6はヘラ状の掘り棒の可能性もある。4がムクノキ、6がタブノキであるほかはアカガシ亜属製である。10は反柄であるが緊縛部分が約25cmあり、かなり長い軸部をもつ曲柄鍬の装着が想像される。エゴノキ属製である。12は馬鍬である。短い歯が1本残っている。県内では最古の例であり、ほかに館山市江田条里遺跡で奈良平安時代のものが出土しているのみである。クリ製である。13は輪カンジキ型田下駄の足板で、両端に輪を止めるための穴が開けられている。鼻緒穴は3か所でツゲ製である。14は木部挿入方式の穂摘具木台部である（詳細は第5章第1節参照）。縦杵は2点出土している（15・16）がともに握部と搗き部との境に段を作るもので、ソロバン玉状の突起はみられない。アカガシ亜属製である。

11. 市原条里制遺跡（第57～60図・写真図版5右下） 市原市市原字一ノ坪に所在する。東京湾に面した標高約5mの沖積低地上に立地する。1と4が溝からの出土であるほかは水田跡からの出土である。水

田跡および溝は条里型水田に伴うもので9世紀後半から10世紀代の年代が与えられる。水田跡では畦畔の補強材として多数の杭とともに木製品が埋められていた。そのため出土層位的には水田耕作土と自然堆積した泥炭層との境部分に集中するが、下位の層が自然堆積層であることなどから前代の木製品が混入したとは考えにくい。

1は風呂鍬で長方形の柄穴をもつ。刃部にはU字形鍬鋤先が装着されていたと考えるが、使用によるスレなどは認められなかった。2はエブリで着柄隆起をもち柄穴は方形である。刃部は鋸歯状を呈する。3は東海系曲柄鍬の系統を引く二股鍬である。軸端部は摩耗しており紐掛け用の突起があったかどうか不明である。軸部の裏面には縦方向に溝が彫られている。1から3まではアカガシ亜属製である。4は鎌の柄で握部の断面形は円形である。端部はグリップエンド状を呈す。イヌガヤ製である。5は釘止め方式の穂摘具で、鉄製の刃部まで完全な形で出土した（詳細は第5章第1節参照）。

6から35まですべて輪カンジキ型田下駄の足板ならびに横木である。市原条里制遺跡出土の木製農具の大半がこの形式の田下駄で、本遺跡の特徴となっている。輪カンジキ型田下駄は大きく板材を加工したものの（6～17）と曲物底板を転用したもの（18～32）とに分類することが出来る。割材使用のものは長方形（6・7）、先端を丸くした長楕円形（8・9・12）、両端を直線的に削ってあるもの（10・11・13～16）、亜字形（17）が認められ、曲物転用のものは長方形（18・19）、先端を丸くした長楕円形（22・23・24）、両端を直線的に削ってあるもの（25・26・29・30）、あまり加工していないもの（20・21・27・29・31・32）が認められる。鼻緒穴は6と22が4穴であるほかは3穴である。輪を止める穴は1穴、2穴、4穴がある。横木は亜字形をしている（33～35）。若干ヒノキが見られるほかは圧倒的にスギ製である。36から44は杵型大足の部材である。

12. 三直中郷遺跡（第61～64図） 君津市三直字沖田に所在する。小糸川左岸に広がる標高約18mの沖積低地上に位置する。報告書は未刊行である。弥生時代中期と古墳時代の溝のほか奈良平安時代の木製品集中箇所が検出された。木製品集中箇所は帯状に連なって検出されたもので、本来的には畦畔の補強材として木製品が埋め込まれていたものである。そのため木製品列を追うと畦畔を復元できる可能性がある。木製品列と下部の弥生期、古墳期の溝とは明らかに方向性を異にしている。なお、図示した木製品はすべて同一遺構からの出土でレベル差もあまり認められないことから、同時期のものと考えられる。

1は明瞭な着柄隆起をもたない直柄平鍬である。方形と思われる柄穴があいている。曲柄鍬は2点出土している。東海系曲柄鍬の特徴をもち、二股のもの（2）と4本歯（3）のものがある。ともに軸端部が欠損しているが、軸部と身部との境は明瞭で、肩部は斜めに削ぎ落としている。2の裏面は刃部にむかって段を作りながら薄く仕上げている。一木鋤が1点出土している（4）。握部は三角形を呈し上端部は横方向に突起を作る。

田下駄類は多数出土している。横型田下駄（5～7）、曲物転用輪カンジキ型田下駄（8・9）、輪カンジキ型田下駄（10～18）、輪カンジキ型田下駄横木（19～21）、高下駄型田下駄（22～26）と種類もまちまちである。横型田下駄の鼻緒穴は4つであり、長楕円形と不正円形のものがある。輪カンジキ型田下駄は亜字形と両端を直線的に削ったものに分けられる。鼻緒穴は3か所開いている。高下駄型田下駄では台形を呈するものとカマボコ形を呈するものがある。27から30は杵型大足とその部材である。ほぼ完形になるものが2点出土した。

31は「タテツチ」で、搗き部から軸部にかけて緩やかに細くなっている。32はT字形をした木製品で鋤の握部である可能性も考えられる。

13. 古市場（2）遺跡（第64図） 市原市古市場字上鎧に所在する。東京湾に面した標高約4mの沖積低地上に立地する。本遺跡は本来市原条里制遺跡の範囲に含まれるものである。帯状に木製品が並んでおり、畦畔の補強材であったと思われる。

1から3は輪カンジキ型田下駄の足板と横木で、4は杵型大足の前木である。5は釘止め方式の穂摘具木台部で、釘を打った穴がみられる（詳細は第5章第1節参照）。

14. 不入斗遺跡（第64図） 市川市国分4丁目に所在する。平川流域の標高約7mの沖積地に立地している。河川改修に伴って出土したもので明確な時期は不明であるが、共伴する瓦や土器類から奈良平安時代のものと考えられる。

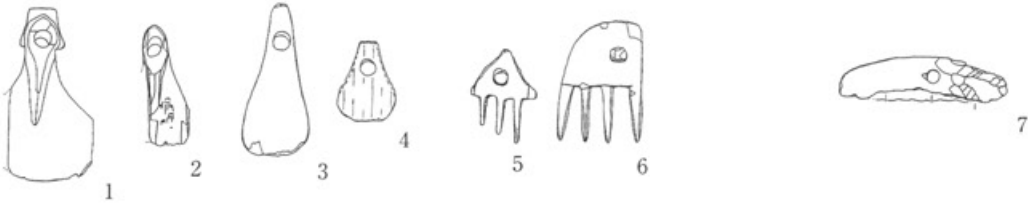
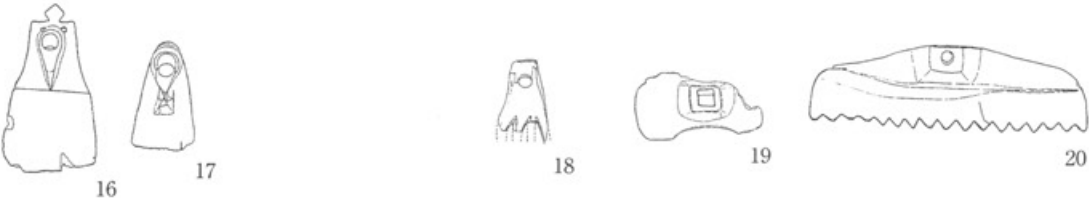
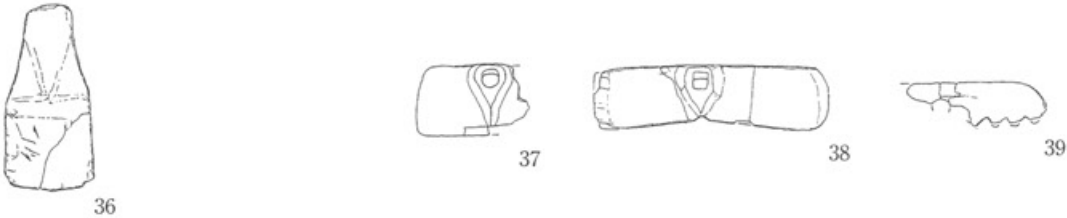


1の曲柄鍬は軸部に小突起が付き、ナスビ形の退化したものであろうか。先端には紐掛け用の突起が作られ、突起裏面は一段薄くなっている。身部の肩部は斜め方向に直線的に削られ、表面中央には長方形の窪みが施されている。2から4は輪カンジキ型田下駄の横木である。2と3は曲物転用材である。なお、木製品と一緒にU字形鍬鋤先が1点出土している。

2 千葉県における木製農具の変遷

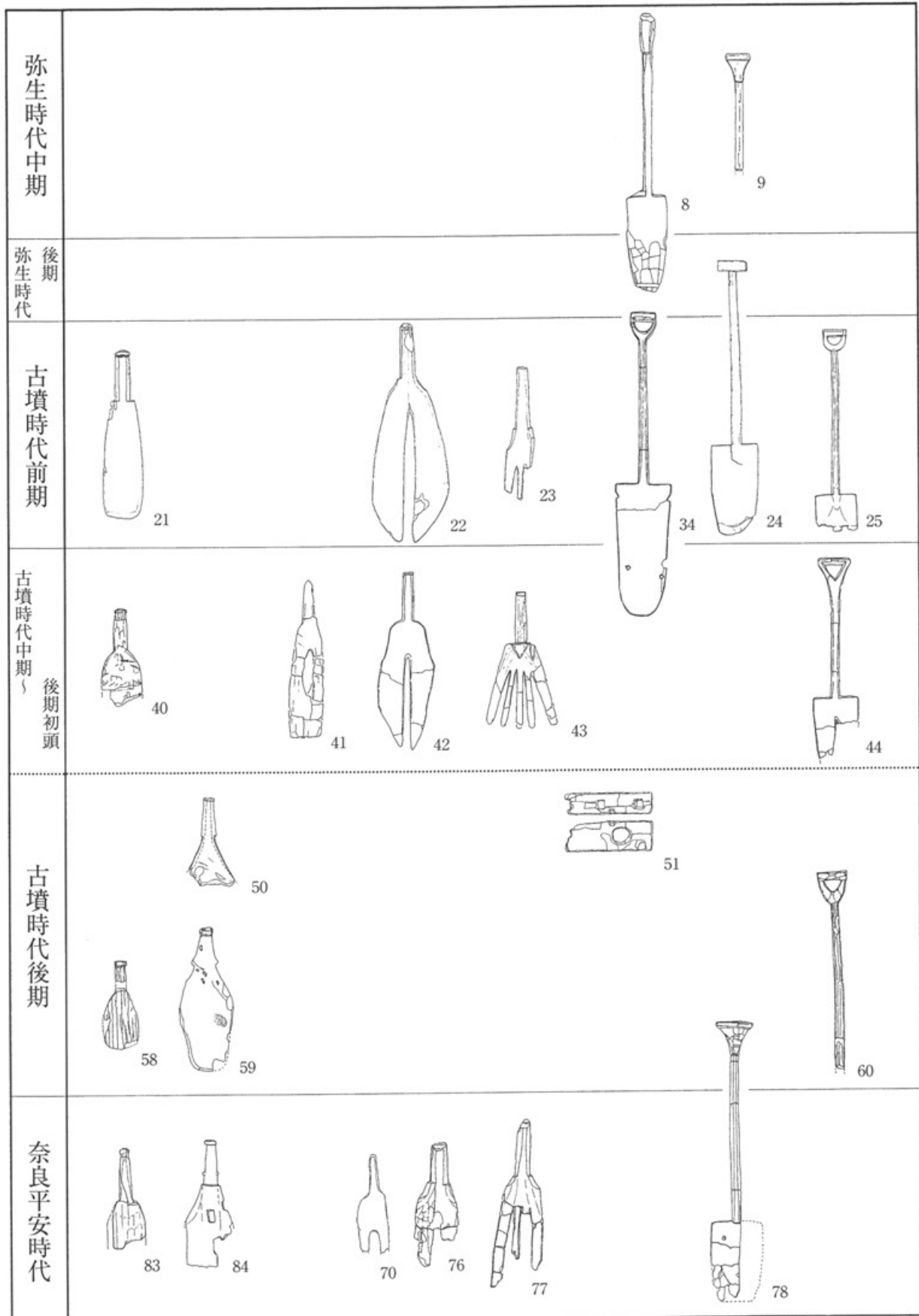
本項ではこれまで集成した資料をもとに千葉県における木製農具の変遷を概略的に述べたい。記述に当たっては木製農具を耕起具・補助具・収穫具・調整具に分類して行うこととした。なお、鍬や鋤については土木具、鎌については穀類の収穫以外に除草具としての性格が考えられるが、今回は耕起具・収穫具として扱うこととしたい²⁾。

1. 耕起具（第28～29図） 県内で最も古い農具資料は弥生時代中期における常代遺跡の資料である。同遺跡の耕起具では、着柄隆起をもつ直柄鍬、着柄隆起をもたない直柄鍬、多股鍬、エブリが確認されている。直柄鍬のバリエーションは豊富で、着柄隆起付きの鍬では柄穴の両側にヒレ状の突起をもつものともたないもの、着柄隆起のない鍬では縦長のものと長さの短いもの、多股鍬では身部が三角形のものとカマボコ形のものがある。このような中で特にヒレ付きの直柄鍬は弥生時代中期を特徴づけるもので、浜野川遺跡や長須賀条里制遺跡などからも製品や未製品が出土している。これまで本県では弥生時代中期の農具出土遺跡を3遺跡確認しているが、常代遺跡から膝柄の可能性のある未製品が出土しているものの工具柄の可能性も残り、いずれの遺跡からも明確な曲柄鍬または膝柄の出土はない。市原条里制遺跡県立スタジアム調査において該期の曲柄多股鍬が出土したとされるが、報告書が未刊行のため詳細な出土状況や共伴遺物などは不明である。しかし、神奈川県逗子市池子遺跡からは同時期の曲柄鍬が出土しており、今後欠落を補う資料が出土する可能性は高いものと考えられる。鋤は一木鋤で握部が三角形で手を掛ける部分に突起を作るものがみられる。

弥生時代後期の資料はまったく出土していない。古墳時代初頭の国府関遺跡からは、直柄鍬として着柄隆起をもつものや多股鍬、「横鍬」、エブリが、曲柄鍬として狭鍬や二股鍬、多股鍬が出土しているが、曲

弥生時代中期	
弥生時代後期	
古墳時代前期	
古墳時代中期 後期初頭	
古墳時代後期	
奈良平安時代	

1～7 常代 16～20 国府関 36～39 五所四反田 55～57 菅生 68・69 市原条里 75 三直中郷
第28図 木製農具変遷図(1)



8・9 常代 21～25 国府関 34 西根 40～44 五所四反田 50・51 郡
58～60 菅生 83 浜野川 84 不入斗 70 市原条里 76～78 三直中郷

第29図 木製農具変遷図(2)


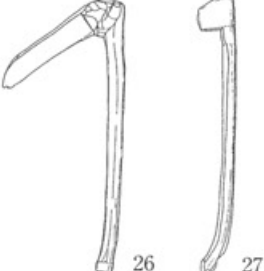

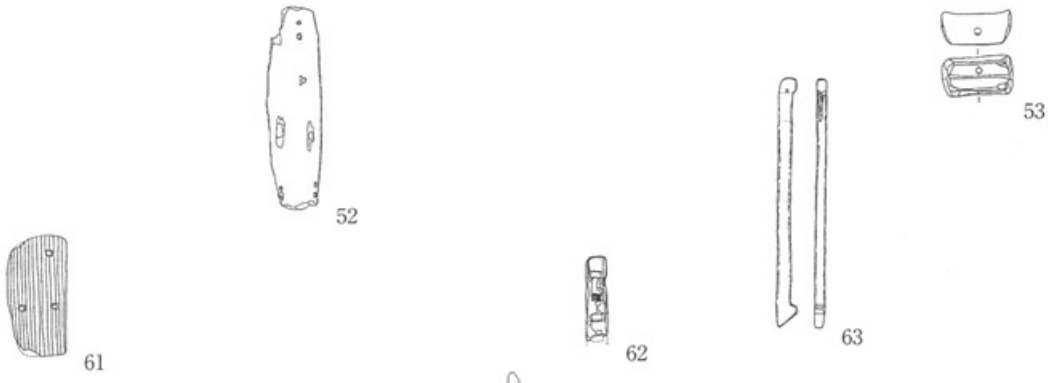
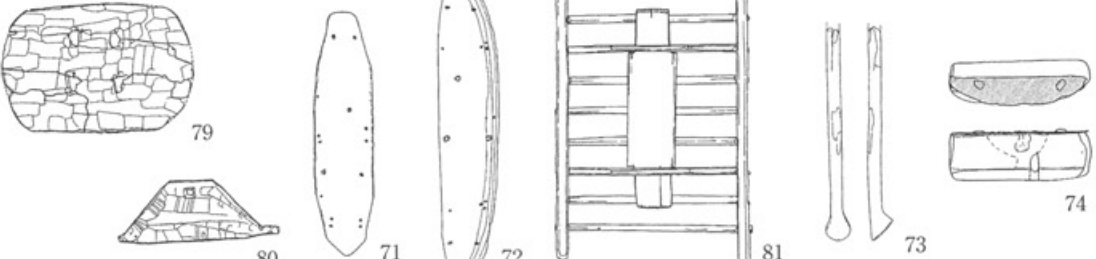
柄鋤のほうが卓越している。直柄鋤では着柄隆起の先端に刃部と平行する稜線が作られるタイプのものが多く出土している。このタイプは同時期の五所四反田遺跡52号跡から出土しているばかりでなく、仙台中在家南遺跡においても報告例が認められ広範な分布を示している³⁾。直柄多股鋤は1点出土しているがこれ以後の時期では認められない。また、このころから刃部に抉りをもつ「横鋤」がみられるようになる。曲柄鋤ではいわゆる「東海系鋤」が特徴的に出土し、芝野遺跡や長須賀条里制遺跡からも類例がみられる。鋤は一木作りで先端が平らになるものと股を作るものがある。

古墳時代中期から後期初頭では五所四反田遺跡の資料から、直柄鋤では着柄隆起のある鋤や横鋤、刃部に抉りをもつ「横鋤」、エブリが、曲柄鋤では狭鋤、スリット入りの狭鋤、二股鋤、多股鋤が確認されている。これらの構成要素は、ほぼ国府関段階の組成を引き継いだ内容で、それぞれの鋤の形態も国府関遺跡のものと共通する点が多い。若干の違いとしては直柄多股鋤が欠落することや新たにスリット入りの狭鋤が出現することである。スリット入りの狭鋤は長野県北部で創出されたと考えられるもので、このタイプのものとしては最南端の資料である⁴⁾。五所四反田遺跡の最も特徴的な資料は、刃部に抉りをもつ「横鋤」であり、全体の出土点数に対する割合は極めて高い。この鋤は身部側面の形態が二股になっているものや刃部を作り出しているものがあることから「諸手鋤」の範疇で捉える考え方もある⁵⁾。しかしながら、着柄隆起の形態や着柄角度からみると両端の刃部を常時使用するには構造上不都合であったと考えられる。具体的な使用方法是不明であるが、刃部が大きく内湾していることや刃部の角度が鈍角をしているものが多いことから、主たる使用は強い打撃を伴うものではなく、土や水をかき集めるような使用方法が想定されるのではないだろうか。この際刃部中央に作られた抉りは、必要以上にたまった土や水を排出するのに有効であったとも考えられる。また、両端に作られた二次的な刃部は、必要に応じて植物の根や茎を切断するのに使用されたのではないか。仮に強湿田や沼地のようなところでの田面の整形や水草の除去・収穫などを想定しておきたい⁶⁾。いずれにしても想像の域を出るものではなく、今後の資料数の増加とその分析、民具との比較、実験的な証明などを通じた説明が待たれる。鋤は一木の二股鋤が出土している。

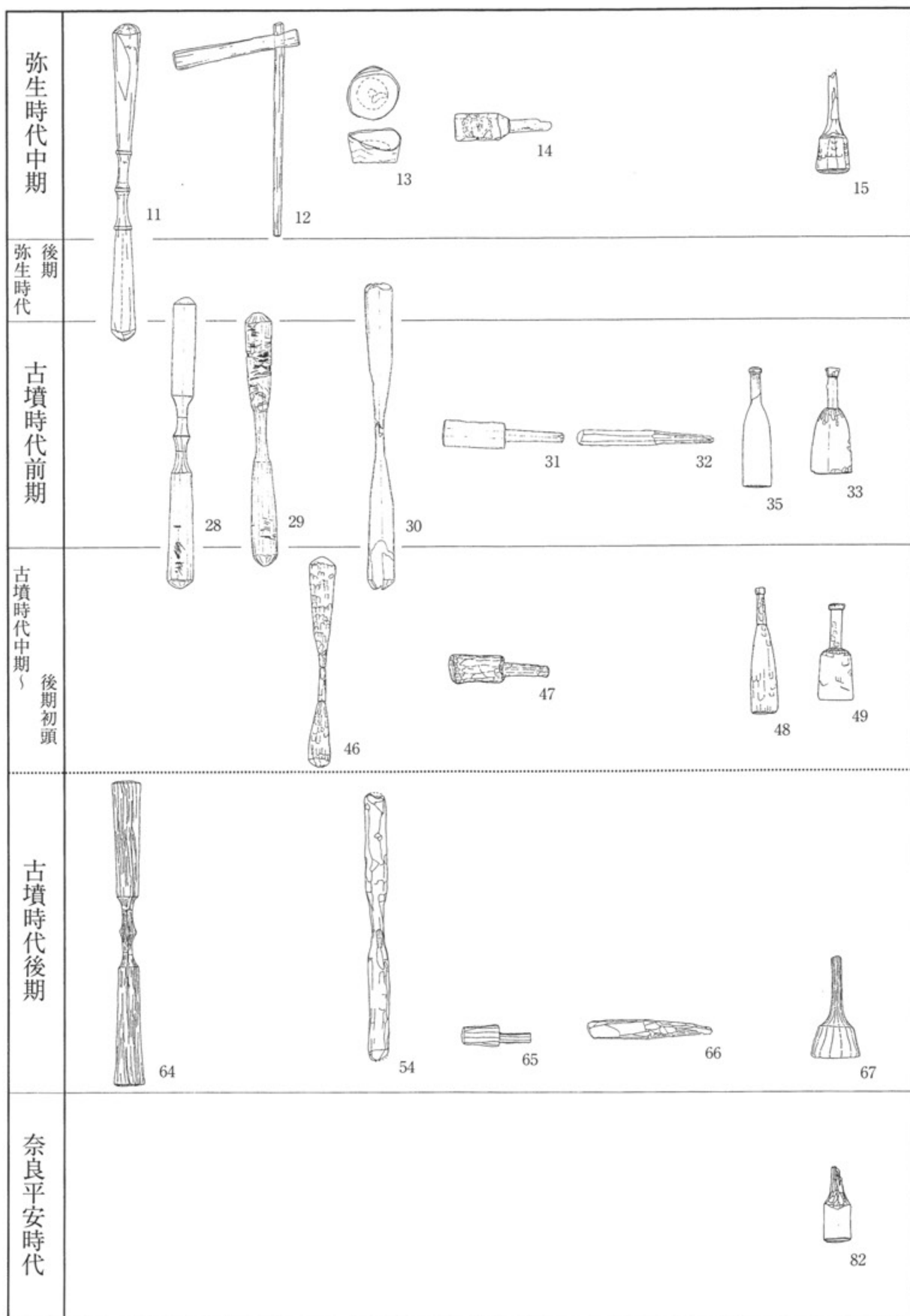
古墳時代後期になると直柄鋤の出土点数は減少する。菅生遺跡から着柄隆起のある鋤や抉りのある「横鋤」のほか着柄隆起をもたない鋤の未製品が出土している。上述の抉りのある「横鋤」はこの時期まで農具組成の一つとして定着している。曲柄鋤ではこれまでの「東海系」に加えて新たに「ナスビ形」の曲柄鋤が出現する。郡遺跡と菅生遺跡から出土しており、菅生遺跡例では刃部にU字形鋤鋤先を装着するための段が作り出されている。また、郡遺跡から馬鋤の一部が出土しており、畜力による田面の耕起が行われていたことを示している。このほか菅生遺跡から組み合わせ鋤のものと思われる柄が出土している。

奈良平安時代には市原条里制遺跡例のようなU字形鋤鋤先が装着される風呂鋤が出現するほか、三直中郷遺跡のように着柄隆起をもたない鋤も依然として使用されている。曲柄鋤については、浜野川遺跡、不入斗遺跡、市原条里制遺跡、三直中郷遺跡の4遺跡5点の出土が知られているほか、南借当川遺跡で曲柄鋤状の木製品（写真のみ掲載）が浜野川遺跡（神門貝塚）で膝柄が出土している。これらはいずれも古代の水田耕作土中または包含層からの出土である。おおむね該期のものと考えられるが、三直中郷遺跡例はやや古相を示しているため、正式報告書の刊行を待って評価すべきものと考えたい⁷⁾。

2. 補助具・収穫具・調整具（第30～31図） 弥生時代中期では田下駄、竖杵、横杵、臼、ツチ類が出土している。このうち竖杵は握部にソロバン玉状の突起が付くものが卓越する。常代遺跡からは横杵が未

弥生時代中期	 <p>10</p>
弥生時代後期	
古墳時代前期	 <p>26 27</p>
古墳時代中期 後期初頭	 <p>45</p>
古墳時代後期	 <p>52 53 61 62 63</p>
奈良平安時代	 <p>71 72 73 74 79 80</p>

10・63常代 26・27国府関 45五所四反田 52・53郡 61・62菅生 79～81三直中郷 71～74市原条里
第30図 木製農具変遷図（3）



11～15常代 28～33国府関 35村田服部 46～49五所四反田 54郡 64～67菅生 82三直中郷
第31図 木製農具変遷図（4）

製品も含め4点出土しており他に例を見ない。ツチ類には打面が側面にあるヨコツチと打面が木口面にあるものがある。後者については便宜的に「タテツチ」として記述することとする。なお、木製農具においてもこの時期の収穫具は欠落している。

古墳時代前期になると収穫具としての鎌柄が登場するほか、一木で刃部まで作られた木鎌が出土している。なお、木鎌については国府関遺跡の項に若干述べておいた。竪杵には握部にソロバン玉状の突起をもつもの、握部と搗き部との境に段差をもつものともたないものの3つのタイプがみられる。ツチ類にはヨコツチと「タテツチ」があり、ヨコツチは握部と搗き部との境に段のあるものと段が無く粗製のものがある。また、使用面が縦方向なのか横方向なのか判然としないものがある。

古墳時代中期から後期初頭になると五所四反田遺跡から輪カンジキ型田下駄が出土するようになる。調整具については前代と内容的に大きな相違はみられず、細部のタイプに欠落するものがあるのみである。

古墳時代後期には左右履き分けの田下駄や杵型大足が出現するほか、木部挿入方式の穂摘具台木が出土している。

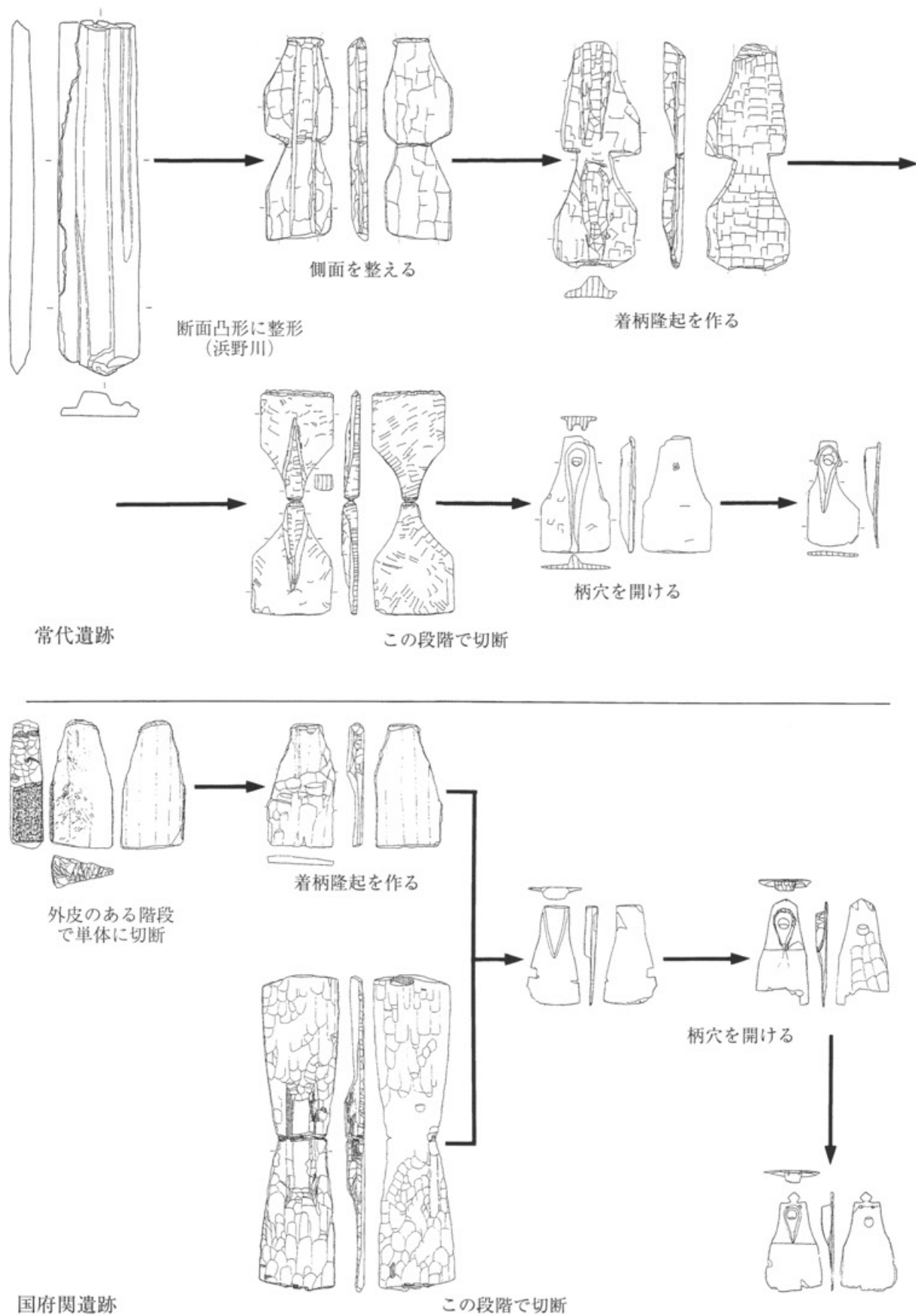
奈良平安時代には輪カンジキ型田下駄を中心として各種の田下駄が認められるほか、曲物転用の田下駄が盛行する。鎌柄は古墳時代まで断面形は長方形であったが、新たに円形のものがみられるようになる。また、木部挿入式に替わって釘止め方式の穂摘具が出現する。

以上のように千葉県の木製農具について大まかな変遷を述べてきた。これらを時代ごとにまとめると、水田耕作が本格的に導入された弥生時代中期において、すでに直柄鍬を中心とした耕起具と他の道具とのセット関係が確立しており、水稻農耕技術に伴うシステム全般が整った状態で当地域に持ち込まれたことを示している。また、耕起具の中心は直柄鍬であるが、ある種特徴的なスタイルのものもみられるが、全体としては多様な形態の鍬が使用されていたと考えられる。古墳時代前期初頭には東海系の曲柄鍬が積極的に導入されるほか、直柄鍬も含め定形化した農具が作られるようになる。この傾向は古墳時代後期初頭まで続くと言えよう。古墳時代後期は前期以来の農具を継承しつつも新たにナスビ形曲柄鍬が出現するほか、鉄製刃先を意識した農具や畜力を前提とした馬鍬の出現など、農耕技術の大きな変化を表している。奈良平安時代は基本的に古墳時代後期に整った農具組成を継承したのものと見えよう。ただし、資料数や出土状況から奈良平安時代として8世紀から10世紀段階をひとまとめにしたため、この時代内での変化のあり方を明らかにすることは出来なかった。また、三直中郷遺跡の評価など、今後の調査結果如何によっては変更が必要な点も多々ある。

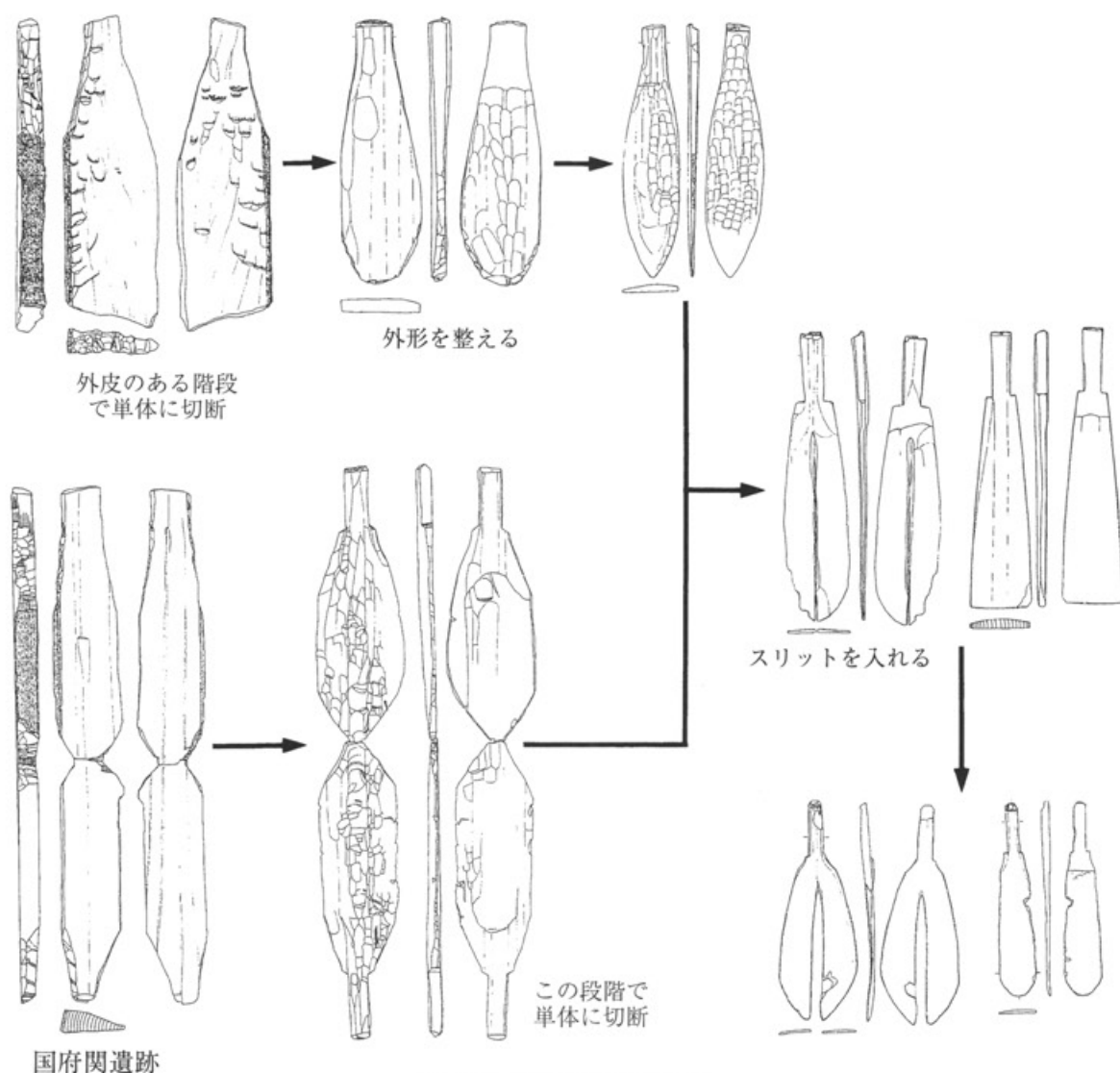
3 鍬の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について

ここでは、鍬の製作工程を復元するとともに農具の種類と樹種との関係について、常代遺跡と国府関遺跡の成果を中心に若干述べる（第32・33図、第2表）。

常代遺跡では着柄隆起を伴う直柄鍬が14点、同未製品が8点出土している。これらによると、先ず丸太をミカン割りにしたものを板状にし、着柄隆起部分を帯状に残しながら周囲を成形する。この段階では2点から3点が縦方向に連結された状態のまま、同時に作業が進められた。外形がほぼ仕上がった時点で単体に分割され、最終的に柄穴が開けられ完成する。常代遺跡における鍬の作業工程で特徴的なのが、着柄隆起と外形がほぼ整うまで数点が連結したままの状態であり、外形調整の最終段階になって単体に分割し



第32図 直柄鍬の製作工程



第33図 曲柄鍬の製作工程

て柄穴を開けることである。このような製作工程は同時期の浜野川遺跡においても確認でき、弥生時代中期における着柄隆起を伴う直柄鍬の一般的な製作工程であったことが窺われる。

国府関遺跡では着柄隆起を伴う直柄鍬が14点、同未製品が8点出土しているが、常代遺跡のような工程を取るものも若干認められるものの、多くが初期の荒割り段階で単体に切り離しており、着柄隆起を含めた細部の加工は単体で行われている。このように古墳時代前期には、ほぼ最終段階で単体に分割する工程と初期の段階で分割する二系統の製作工程が存在していたようである。最終分割工程は古墳時代中期から後期初頭の五所四反田遺跡でも確認され、初期分割工程は古墳時代前期の郡遺跡、後期の菅生遺跡でもみられることから、両工程は長い間併存していたといえる。なお、今回の検討では両工程の違いと製品の形態差とは必ずしも一致はせず、直柄鍬の形態の違いと製作工程の違いを明らかにすることは出来なかった⁸⁾。むしろ両者の関係に明確な違いはなかったようである。また、曲柄鍬についても外形がほぼ整うまで2点程度連結したままのものと初期段階で単体に切り離しているものがみられ、直柄鍬の製作工程のあり方と共通している。

このように鍬の製作工程についてみてきたが、弥生時代中期においては一系統の製作工程であったもの

が、古墳時代前期には複数の工程が現れたと言える。このことは農具組成の変化と共に古墳時代初頭が一つの画期であったことを物語っているのではないだろうか。

つぎに木製農具製作における樹種選定がどのようなものであったのか若干述べることとしたい。千葉県の木製品の樹種同定は、鈴木三男、能城修一両氏が精力的におこない、農具製作における樹種選択の実体がかなり明らかになりつつあるといえる。第2表は両氏が分析をおこなった弥生時代中期の常代遺跡と古墳時代前期初頭の国府関遺跡の結果を基に、報告書に図示されている鋤鋤類、杵ツチ類の樹種を表したものである。なお、直柄鋤aとしたものは、着柄隆起を伴うもの。直柄鋤bとしたものは、着柄隆起を伴わないものを指している。また、未製品については、明らかに完成品の器種が判るものに限定してカウントした。

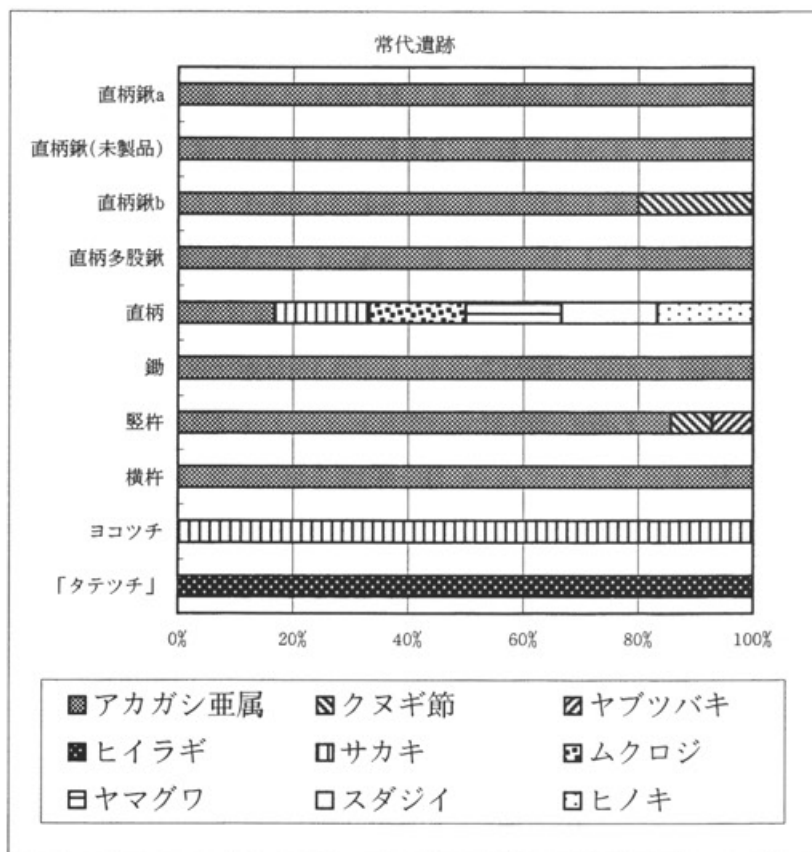
それによると、直柄鋤、直柄多股鋤、「横鋤」、曲柄鋤など鋤類は、未製品も含めて弥生時代中期から古墳時代前期初頭まで一貫してアカガシ亜属を限定的に選択していることがわかる。この傾向は古墳時代中期から後期初頭の五所四反田遺跡や古墳時代後期の郡遺跡、奈良平安時代の市原条里制遺跡でも変わらず、当地域においては終始一貫して鋤にはアカガシ亜属が選択されつづける傾向を示している。鋤に装着すべき直柄と膝柄についてみると、直柄の樹種は常代遺跡で6点中すべてが別の樹種であり、国府関遺跡においても5点で4種類の樹種が使用されている。また、両遺跡で共通する樹種もアカガシ亜属とヤマグワのみであり、多種多様な樹種が選択されている。これに対して膝柄は国府関遺跡で28点図示されているが、28点中26点93%がサカキで圧倒的に選択率が高い。この傾向は五所四反田遺跡でも継承されるが、浜野川遺跡（神門遺跡）出土の奈良平安時代の膝柄はイヌガヤ製で、膝柄にイヌガヤが限定的に使用される伝統は奈良平安時代まで引き継がれなかった可能性もある。また、五所四反田遺跡の反柄はムクロジ製である。このように見てくると、鋤類はアカガシ亜属が、膝柄はサカキがかなり限定的に選択され、直柄は樹種の選定が厳格ではなかったことが明らかである。鋤はアカガシ亜属が卓越するが、クヌギ節やトネリコ属も若干含まれる。

杵ツチ類では堅杵は常代遺跡、国府関遺跡ともに80%以上がアカガシ亜属で若干のヤブツバキとクヌギ節がみられるという比率である。五所四反田遺跡や郡遺跡出土の堅杵もアカガシ亜属であり、同種が主に選択されていたと言える。側面に打面をもつヨコツチは、サカキ、エノキ属、アカガシ亜属など5種類が認められ、特定の樹種への偏りはみられない。また、五所四反田遺跡で出土したヨコツチ3点も、2点がアカガシ亜属、1点がヒノキという内容である。これに対して搗き部が釣鐘形を呈し木口面に打面のある「タテツチ」は、常代遺跡で2点全てが、国府関遺跡で4点中3点がヒイラギ製で樹種選択に偏りがみられる。この傾向は五所四反田遺跡や三直中郷遺跡でも認められ、「タテツチ」とヒイラギは密接な関係を示している。

以上のように、木製農具製作に当たってはかなり樹種を限定して製作されるものと、その選定が緩やかなものとは分類されるといえる。用材の選定は遺跡周辺の森林相を反映していることは言うに及ばないが、製作される農具の機能的側面が大きな要因となっていることも当然のことである。逆に樹木がもつ弾力性や硬さなどの特性から農具の機能面を復元することも考慮する必要があるだろう。

第2表 農具別樹種一覧表

鋤の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について



木製品	樹種	点数	割合
直柄鋤a	アカガシ亜属	14	100%
	合計	14	-
〃(未製品)	アカガシ亜属	8	100%
	合計	8	-
直柄鋤b	アカガシ亜属	4	80%
	クヌギ節	1	20%
	合計	5	-
直柄多股鋤	アカガシ亜属	8	100%
	合計	8	-
直柄	アカガシ亜属	1	17%
	サカキ	1	17%
	スダジイ	1	17%
	ヤマグワ	1	17%
	ムクロジ	1	17%
	ヒノキ	1	17%
	合計	6	-
鋤	アカガシ亜属	2	100%
	合計	2	-
竪杵	アカガシ亜属	12	86%
	クヌギ節	1	7%
	ヤブツバキ	1	7%
	合計	14	-
横杵	アカガシ亜属	4	100%
	合計	4	-
ヨコツチ	サカキ	3	100%
	合計	3	-
「タテツチ」	ヒイラギ	2	100%
	合計	2	-



木製品	樹種	点数	割合
直柄鋤a	アカガシ亜属	11	100%
	小計	11	-
〃(未製品)	アカガシ亜属	14	100%
	小計	14	-
直柄多股鋤	アカガシ亜属	1	100%
	小計	1	-
「横鋤」	アカガシ亜属	2	100%
	小計	2	-
直柄	アカガシ亜属	1	20%
	ヤマグワ	1	20%
	トネリコ属	1	20%
	ムラサキシキブ	2	40%
	小計	5	-
曲柄鋤	アカガシ亜属	48	96%
	クヌギ節	2	4%
	小計	50	-
〃(未製品)	アカガシ亜属	19	100%
	小計	19	-
膝柄	サカキ	26	93%
	ヒサカキ	1	4%
	スダジイ	1	4%
	小計	28	-
鋤	アカガシ亜属	8	80%
	クヌギ節	1	10%
	トネリコ属	1	10%
	小計	10	-
竪杵	アカガシ亜属	10	83%
	ヤブツバキ	2	17%
	小計	12	-
ヨコツチ	アカガシ亜属	2	22%
	サカキ	1	11%
	カエデ属	1	11%
	クロモジ	2	22%
	エノキ属	3	33%
	小計	9	-
「タテツチ」	サカキ	1	25%
	ヒイラギ	3	75%
	小計	4	-

4 出土遺構から見た木製品構成比率について

千葉県内において木製農具が出土した遺構についてまとめると、(1)河川跡や基幹水路となりうる大溝から出土したもの(常代遺跡・国府関遺跡・五所四反田遺跡・西根遺跡・菅生遺跡・市原条里制遺跡)、(2)小型の溝から出土したもの(長須賀条里制遺跡・芝野遺跡・郡遺跡・常代遺跡)、(3)遺物包含層や水田耕作土から出土したもの(浜野川遺跡・村田服部遺跡・市原条里制遺跡・三直中郷遺跡・古市場(2)遺跡・不入斗遺跡)に分類することができる。

(1)では常代遺跡、西根遺跡で堰が検出され、国府関遺跡においても堰の構築材と考えられる部材や編み物などが出土していることから、いずれも農業用水系統の中で基幹水路となりうるものと考えられる。また、五所四反田遺跡では、大溝がクランク状に曲がっており、人工的に流路を変更している可能性もある。これらの溝からは、多量の土器類と共に木製品がかなり出土する傾向が認められる。木製品には加工途中の未製品も含まれるほか、一部が焼けて炭化したものもしばしば見受けられる。このことは、一見すると同じ溝内で木製品の生産と廃棄が行われていたことを示しているようにみえる。しかしながら、常代遺跡や国府関遺跡における粒度分析の結果では、溝が洪水などで一気に埋没した過程を示しており、本来は生産と廃棄は同じ水路でも区別されていたものが洪水で流され、堰周辺に集積されたと考えた方が自然であろう⁹⁾。

(2)は(1)とした基幹水路から枝分かれした水路で、長須賀条里制遺跡や芝野遺跡のように同程度の製作段階を示す未製品のみが数点出土する例がみられる。とくに芝野遺跡では溝横に杭と矢板で補強した溜め井状の施設を設置して未製品を水付けにしており(写真図版5右下)、本来(1)においても製作段階ごとに類似の施設が造られていた可能性も考えられよう。

上記の(1)や(2)と様相が異なるのが(3)で、市原条里制遺跡・三直中郷遺跡・古市場(2)遺跡はいずれも木製品が水田畦畔に埋め込まれた状態で出土しており、畦畔を補強するための構築材としての性格が強いものと言える。そのため市原条里制遺跡において樹種同定を行った299点のうち、約半数にあたる148点が大足、田下駄、曲物で、器種の判らない板材も79点と畦畔補強に必要な板系統の遺物が多い。

つぎにこれまで述べてきた状況をふまえて、(1)に相当し木製品の種類・量ともに多い、常代遺跡と国府関遺跡について器種別の構成比率を見てみたい。構成比率は鈴木三男、能城修一両氏による樹種同定表に基づいて行った。それによると常代遺跡では、比率の高い順に建築材(21%)、農具(19%)、杭(15%)、容器(14%)、工具(6%)、弓(2%)、その他(24%)であり、国府関遺跡では、同じく比率の高い順に農具(39%)、建築材(18%)、工具(10%)、容器(9%)、弓(4%)、その他(21%)であった。このように両遺跡とも全体の中で農具の比率がかなり高いことがわかる。さらに建築材には堰の構築材として使用または二次利用されたものが多く含まれることが想定されるため、なおさら農具の突出ぶりが際立つ内容と言えよう。また、農具の中においては特に鍬類が多くを占める結果となっている。このような傾向は、五所四反田遺跡や菅生遺跡でも認められ、弥生時代以降古墳時代に至るまで出土木製品における鍬の優勢は変わらないと言える。このように農具特に鍬が卓越する理由としては、農作業において鍬がもっとも使用頻度の高い農具であることを示しているとともに、アカガシ亜属という堅い性質の木材を使用するため製作に時間がかかる、破損などに対応するため常に代わりを用意する必要があるなどのことが想定される。また、五所四反田遺跡で刃部に抉りをもつ「横鍬」が卓越していることなどは、地域による生産活動の違いを反映しているものか、鍬製作の専門集団が存在していた可能性も考えられるが、現時点では

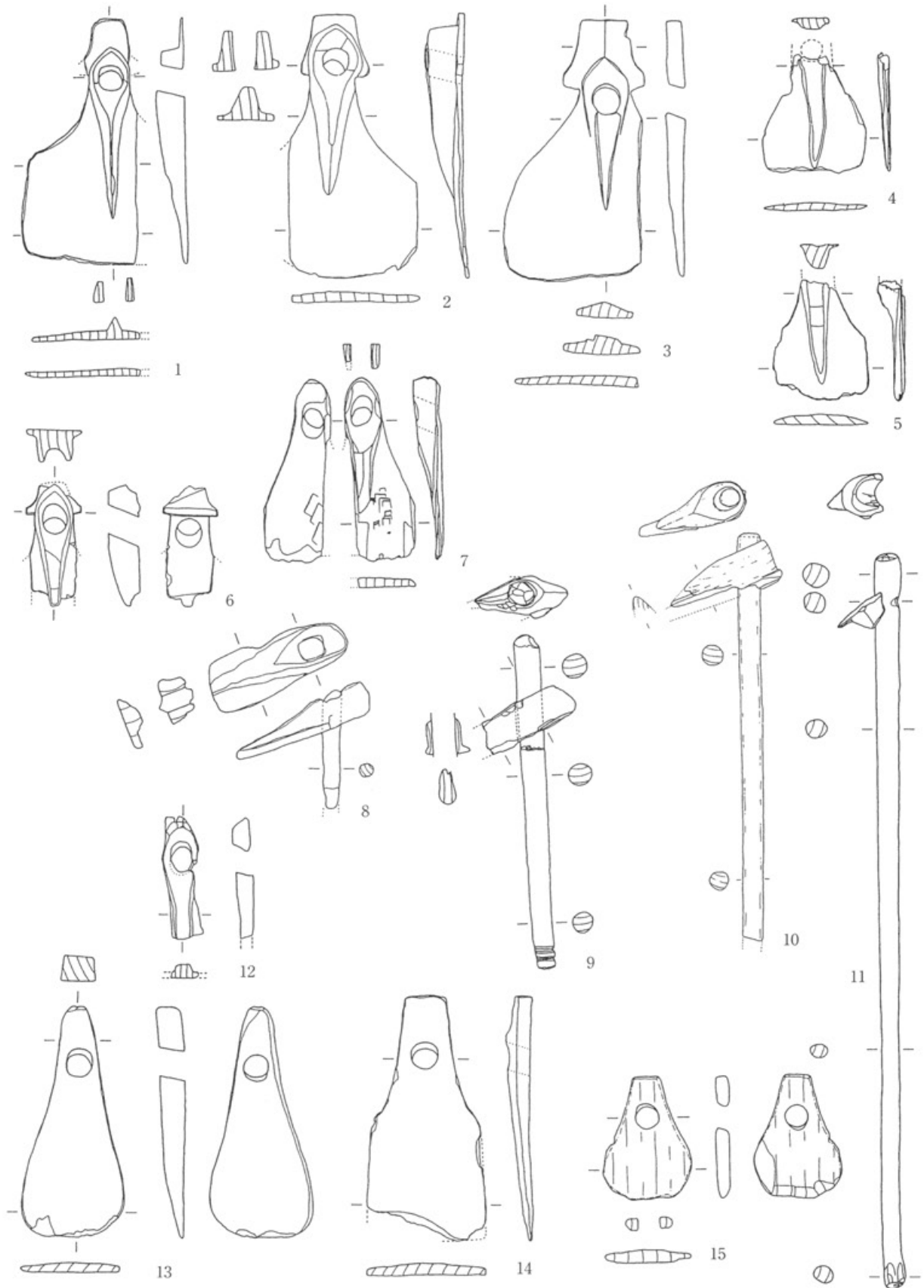
判然としない。

5 小結

以上のように県内出土の木製農具について、変遷や製作工程、樹種の選定、構成比率などを概観してきた。それによると大きく見た場合、農耕に必要な道具は水稻耕作が本格的に導入された段階から整った組成を示しており、時代の変化にも係わらず鋤中心の組成に変化は認められないと言えよう。しかしながら、各器種や製作工程の違いなどに目を向けると、古墳時代初頭と古墳時代後期において大きな技術的变化が見られるのではないだろうか。いずれにしても現段階では弥生時代後期の資料が欠落していることや奈良平安時代遺物についての帰属時期問題など、今後の資料の増加と研究の進展に期待するところが大きいのも事実である。また、農具それ自体についても、水稻耕作ばかりではなく畠作や土木工事などを念頭に置きながら機能的側面についても考えていく必要があることを痛感した。

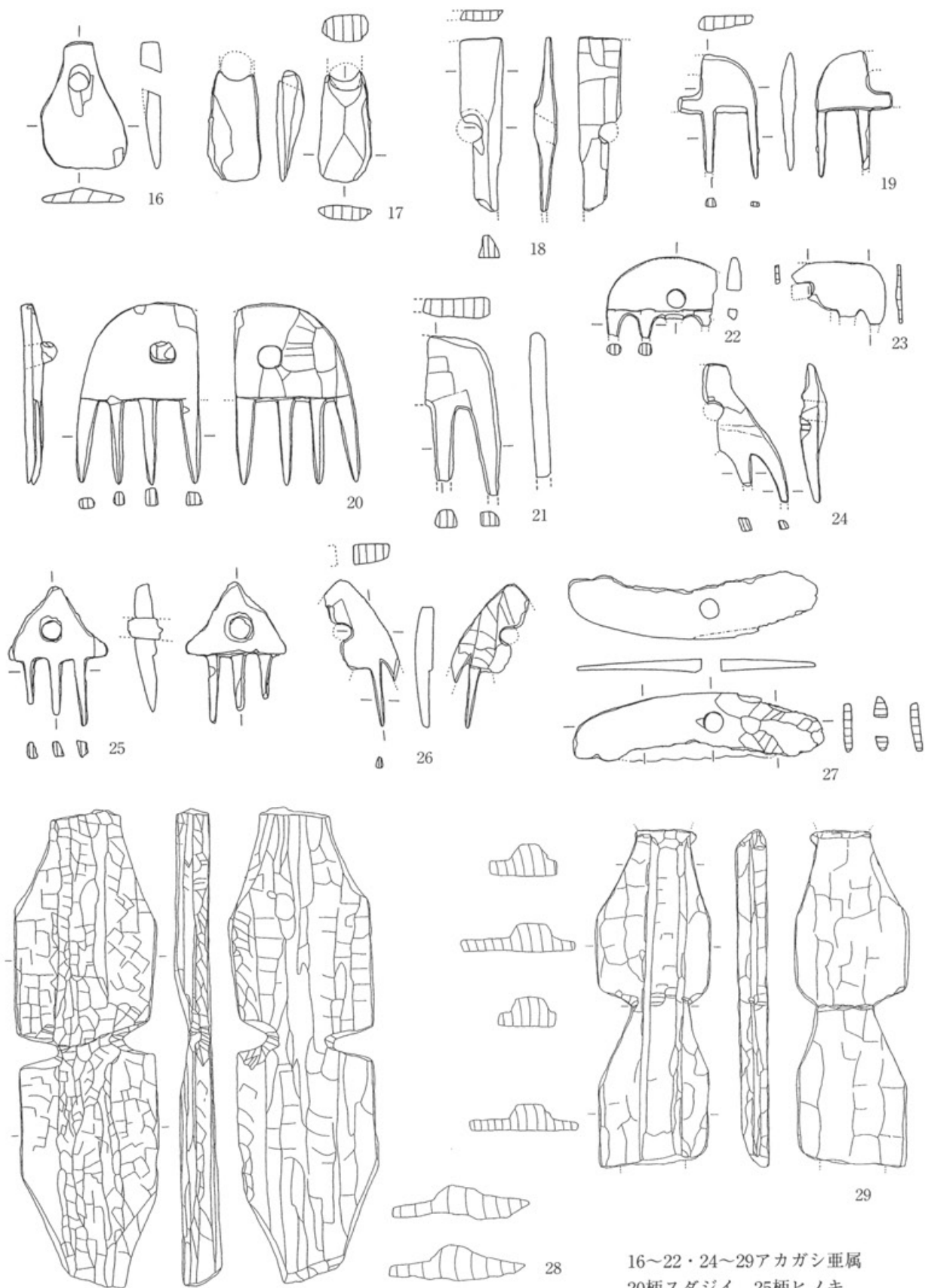
注

- 1) 樋上 昇 2000 「『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか」『考古学研究』47・3
- 2) かつて筆者は、千葉県下の農具の変遷についてまとめる機会があったが、以降資料が若干増加したものの概ね従前と変わらぬ変遷過程をとるものと考えている。その後、小川浩一氏により上総地域の木製農具の変遷図が示されているが、器種認定や変遷系統などにおいて本論と相違する部分も見られる。
大谷弘幸 1994 「千葉県における農具の変遷」『古代における農具の変遷』静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか
小川浩一 1995 「五所四反田遺跡検出の木製農耕具について」『市原市文化財センター研究紀要Ⅲ』市原市文化財センター
- 3) 工藤哲司 1996 「中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類」『中在家南遺跡他』仙台市教育委員会
- 4) 樋上昇氏によると、五所四反田遺跡出土のスリット入り狭鋤の祖形は長野県北部で創出されたナスビ形鋤に求められ、このタイプの鋤が北関東に伝播し、東海系曲柄鋤と融合して南関東へと流入したものと考えられる。
樋上 昇 2000 「3～5世紀の地域間交流・東海系曲柄鋤の波及と展開」『日本考古学』日本考古学協会
- 5) 中山正典氏や小川浩一氏は、これらの鋤を諸手鋤の範疇でとらえ、側縁部にU字形鋤鋤先の装着を想定し、打ち鋤としての機能を認めている。また、小川氏はこれらの鋤を「U字形鋤鋤先の導入に伴い一時的に出現した特異な形態の鋤」としているが、U字形鋤鋤先出現以前の国府関遺跡においてもすでに同形式の鋤が認められ、農具組成のうえで一定の比率で存在していた可能性を示している。(前掲小川論文)
このほか、山田昌久氏、大村直氏もこの「横鋤」の側縁部に鉄製刃先が装着されていたものと指摘している。
中山正典 1994 「静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具」『瀬名遺跡Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
山田昌久 1994 「関東地方北部における農具の変遷」『古代における農具の変遷』静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか
大村 直 1996 「鉄製農具の組成比」『史館』第28号 史館同人
- 6) 中山、小川両氏は横長に刃部を置いたエブリ的な使用方法を認めながらも、主要な使用部分は両端部と考えているようである。しかし、本文で述べたように着柄角度や柄部に対して内湾する形態から、常に両端部分を用いた打ち鋤的な使用方法を想定するには無理があると考えられる。また、着柄部分を強化するために設けられているはずの着柄隆起下端部に挟りが付けられていることは、強度的にも問題がある。山田昌久氏はこの挟り部分に着目して「土を山形に造成するのに都合のよい道具」を想定されている。
- 7) 山田昌久 1986 「新保遺跡出土木製品・加工材」『新保遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8) 樋上氏は南関東地域から東海系曲柄鋤が消え、ナスビ形曲柄鋤に変わるの6世紀以降のことであるとしているが(前掲注4)、これまでの集成結果からすると9世紀後半から10世紀段階まで両者が残存する可能性が高いものと考えられる。
- 9) 菅谷通保 1994 「1. 新保・小敷田・国府関(1)・広グワの検討」『長生郡市文化財センター年報No.8』長生郡市文化財センター
- 10) こうした遺構の多くが失敗品を廃棄した場所であった可能性が考えられているが、今回の集成を通じては、未製品のうちのどの部分が失敗したために廃棄に到ったのか判別することはできなかった。また、国府関遺跡のように外皮が残る未製品も認められることから、単純に貯木場的な施設と廃棄の場所とを区別することはできなかった。
穂積裕昌 2000 「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について」『研究紀要』第9号 三重県埋蔵文化財センター

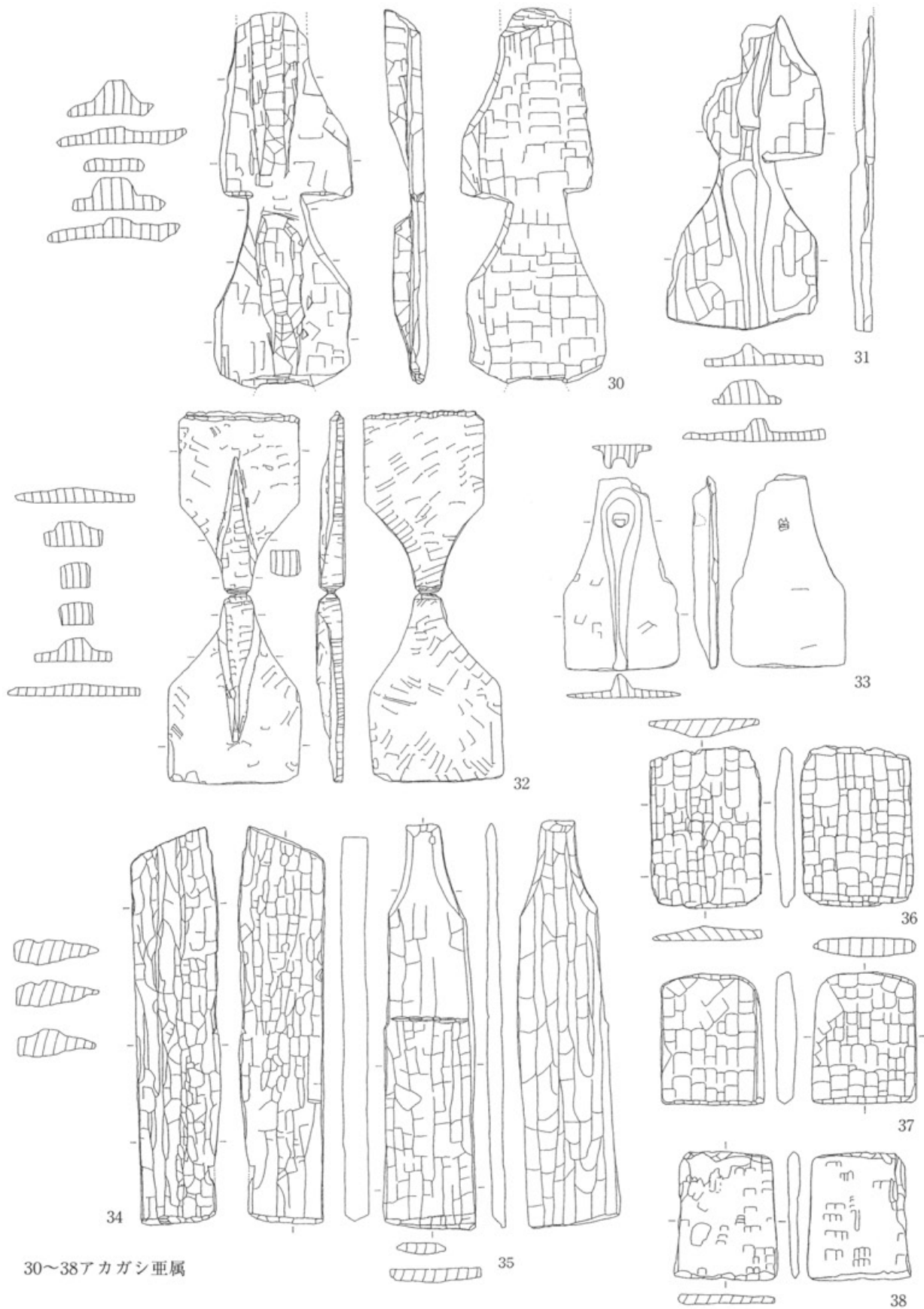


1～13・15アカガシ亜属 9柄ヤマグワ
10柄ムクロジ 11柄サカキ 14クスギ節

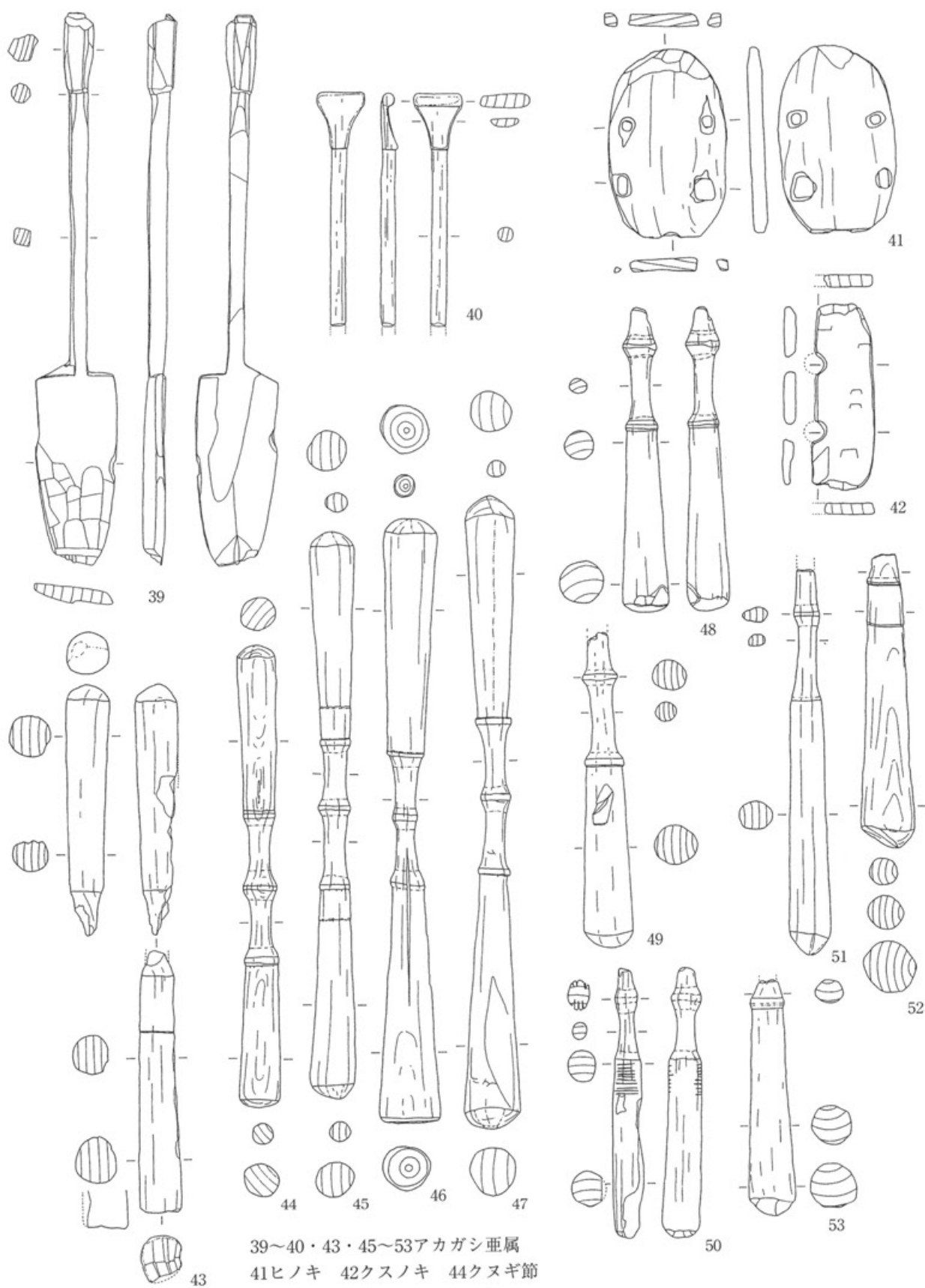
第34図 常代遺跡木製品 (1/8)



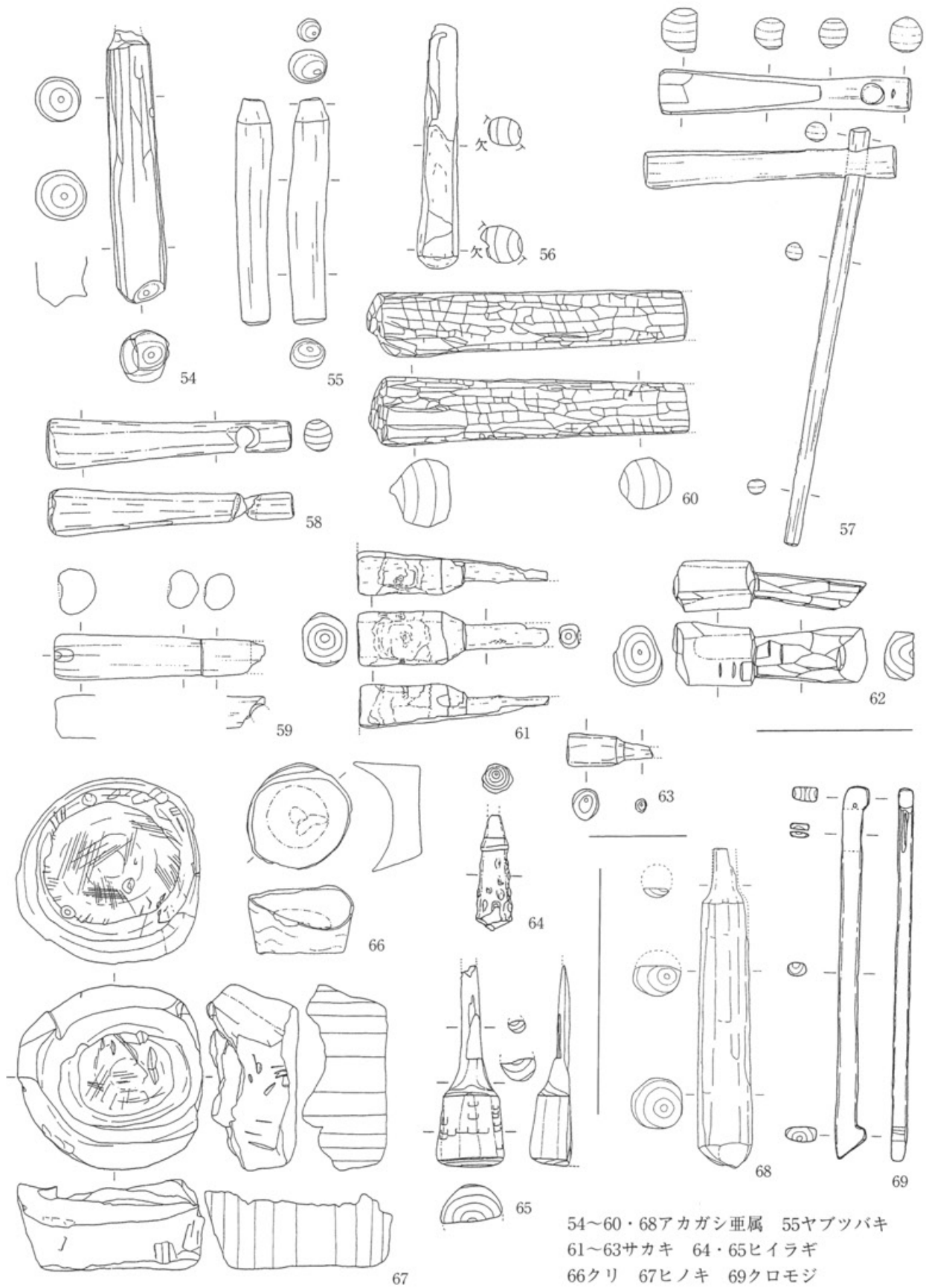
第35図 常代遺跡木製品 (16~27; 1/8, 28・29; 1/12)



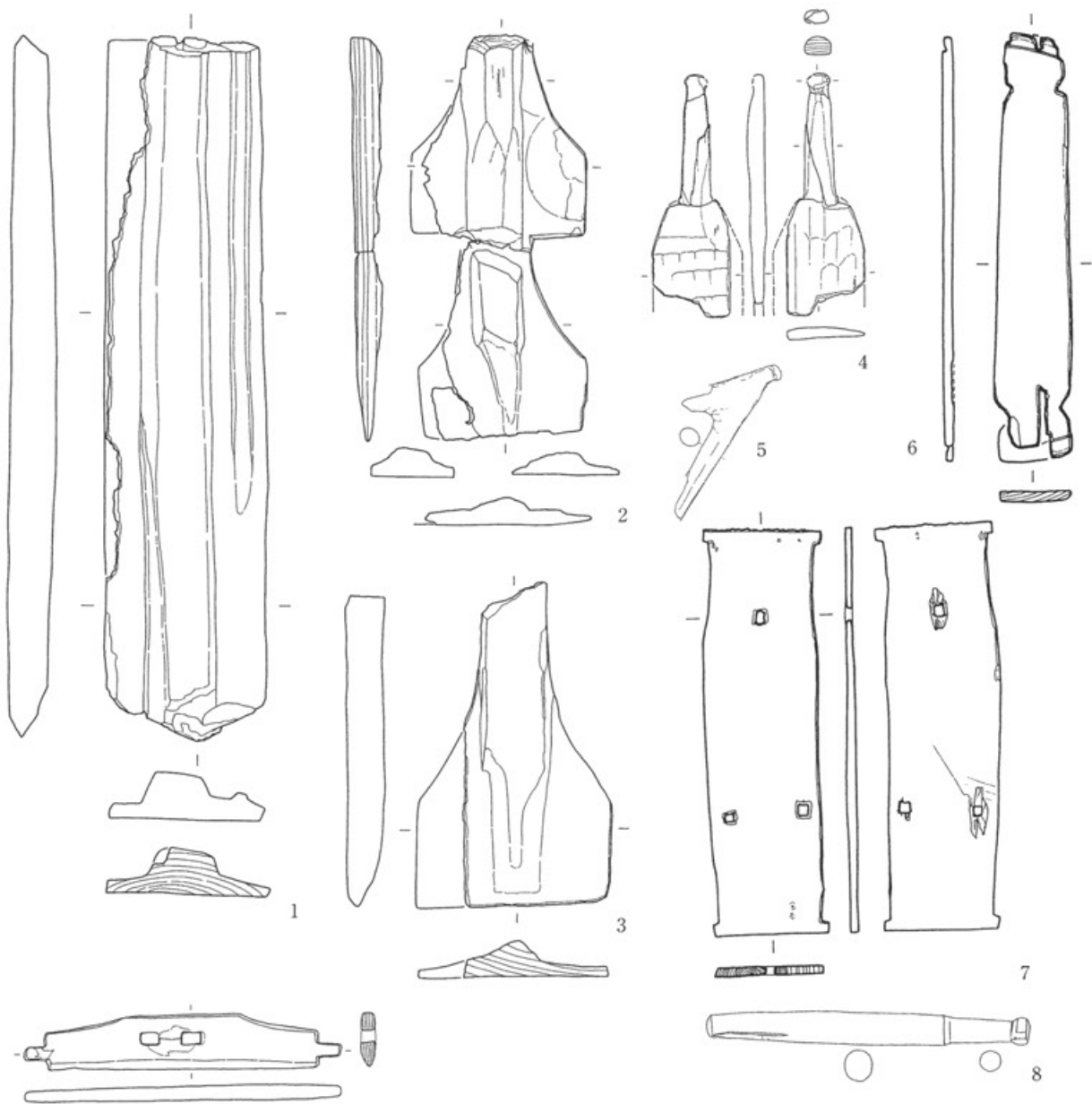
第36図 常代遺跡木製品 (1/12)



第37図 常代遺跡木製品 (39・40・43~53; 1/10, 41・42; 1/8)

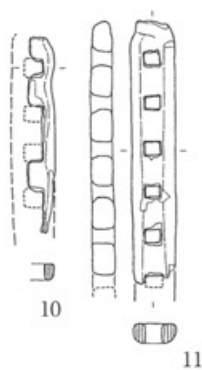


第38図 常代遺跡木製品 (54～60・66～68；1/10, 61～65；1/8, 69；1/6)

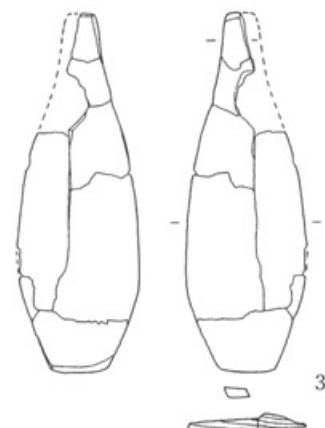
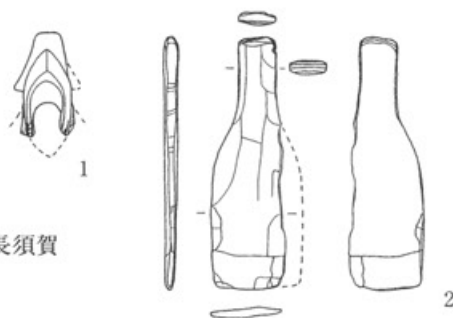


9

浜野川 1～4 アカガシ垂属 5 イヌガヤ
6 スギ 7 ヒノキ 9～11 カヤ



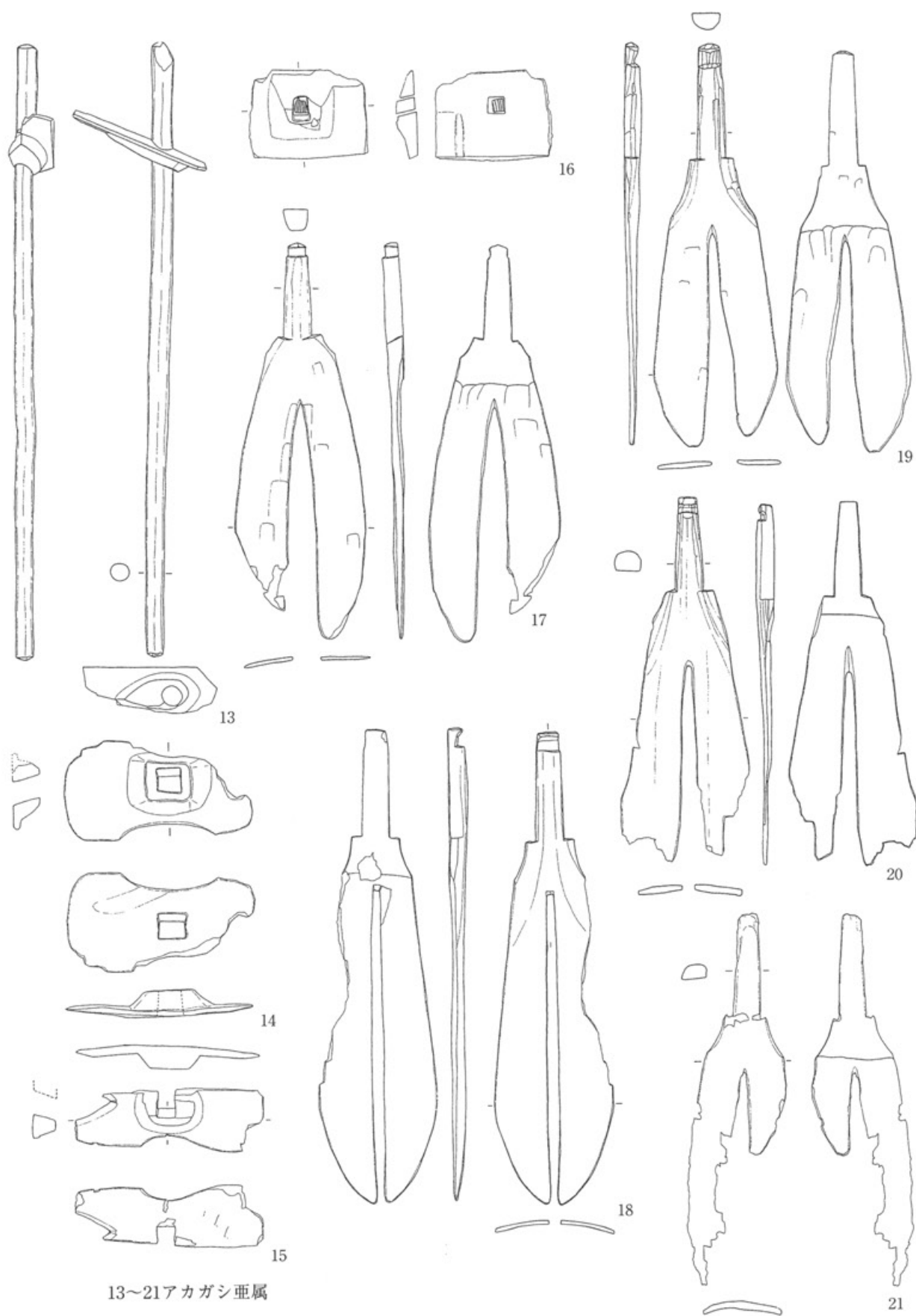
長須賀



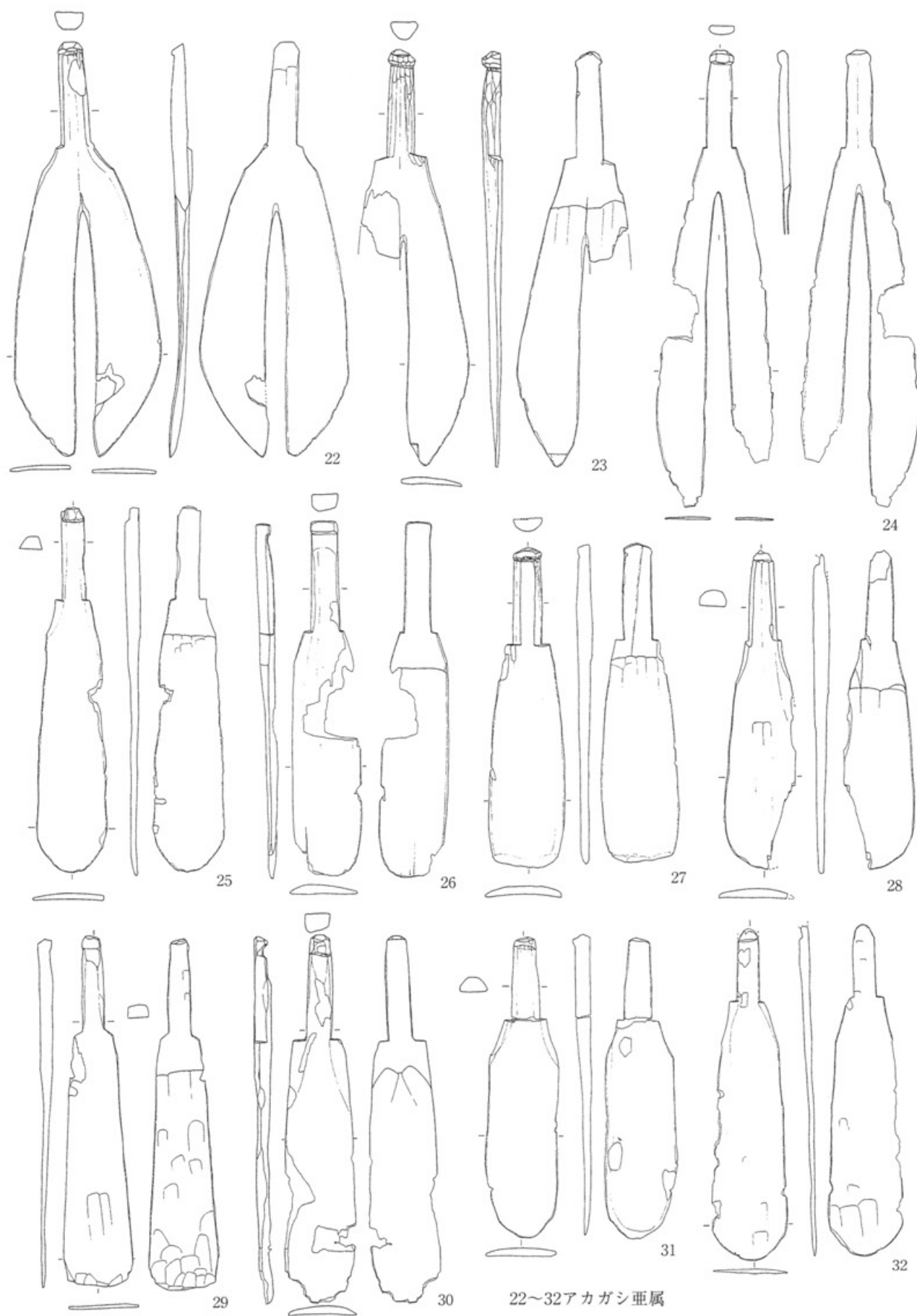
(浜野 1～3 ; 1/12, 4～11 ; 1/8, 長須賀 1 ; 1/8, 2・3 ; 1/12)
第39図 浜野川遺跡・長須賀条里制遺跡木製品



第40図 国府関遺跡木製品 (1/8)



第41図 国府関遺跡木製品 (1/8)



第42図 国府関遺跡木製品 (1/8)